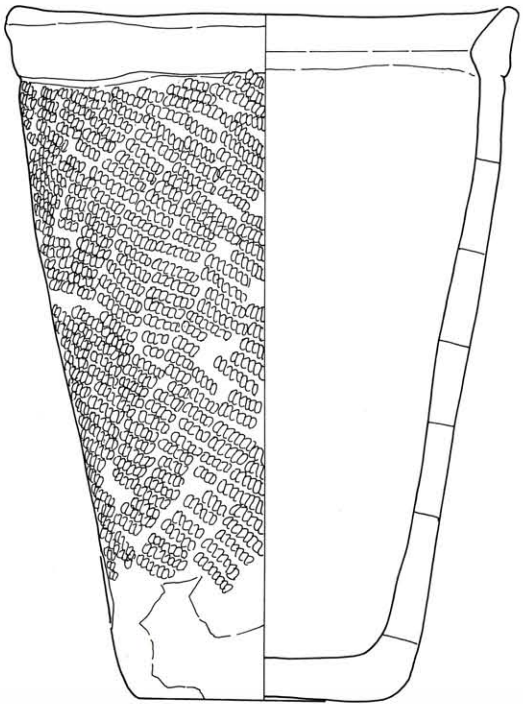
稲敷市埋蔵文化財調査報告書第７集

茨城県稲敷市

沼　田　貝　塚

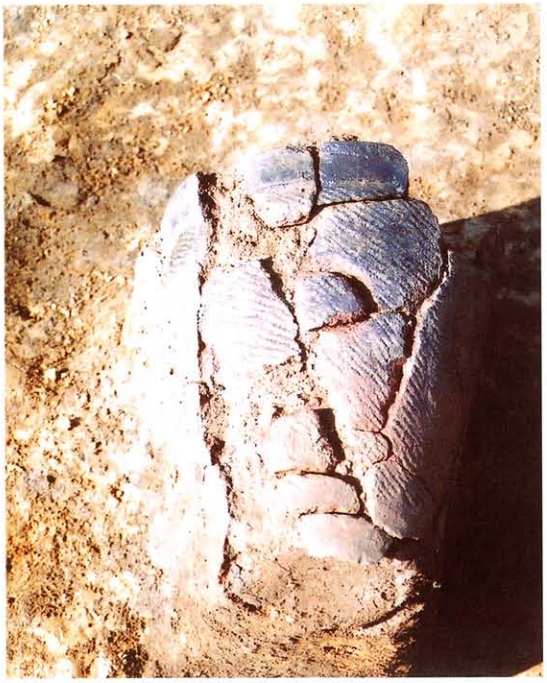
発掘調査報告書



平成22年６月

株式会社　ＮＴＴドコモ
有限会社　日考研茨城
稲敷市教育委員会

沼田貝塚調査区全景



有段竪穴建物SI03遺物出土状況

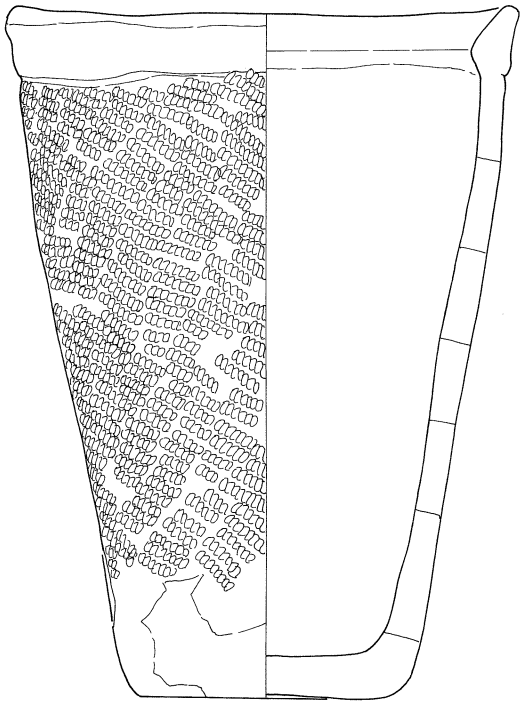
有段竪穴建物SI03出土土器

稲敷市埋蔵文化財調査報告書第７集

茨城県稲敷市

沼　田　貝　塚

発掘調査報告書



平成22年６月

株式会社　ＮＴＴドコモ
有限会社　日考研茨城
稲敷市教育委員会

例　　言

1．本書は、株式会社 ＮＴＴドコモの計画した携帯電話基地局建設事業に伴う、茨城県稲敷市沼田字神田2077番６所在の沼田(ぬまた)貝塚の発掘調査報告書である。

2．調査は、株式会社 ＮＴＴドコモ　茨城支店の委託を受けて、稲敷市教育委員会の指導のもと、有限会社日考研茨城が行った。

3．発掘調査は、平成22年３月１日～３月31日まで行い、同年４月１日から６月28日まで整理作業を行った。

4．発掘調査組織は、下記の通りである。

調査担当者	遠藤　啓子[(有)日考研茨城]	現地・整理
現地調査指導	大渕　淳志[(有)日考研茨城]	現地・整理
整理調査指導	小川　和博[(有)日考研茨城]	現地・整理
現地調査作業員	小野豊、露久保三郎、谷中昌、佐賀実、友部政夫	
整理調査作業員	大渕由紀子・大野美佳[以上(有)日考研茨城]	
事務局	(有)日考研茨城	
調査指導	稲敷市教育委員会・人見暁朗・鈴木美治・松浦敏	

5．本書の編集は、小川和博が行った。

6．本書の執筆は、小川和博・大渕淳志・遠藤啓子が行った。

7．本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。また調査においては世界測地系に基づく座標および水準点を設置し基準とした。

8．遺構の略称に使用した記号は、以下の通りである。

竪穴建物・有段竪穴建物：ＳＩ　　土坑：ＳＫ　　溝：ＳＤ　　柱穴：Ｐ　　撹乱：Ｋ

9. 本書中の色調に関する表現は、新版標準土色帖（農林水産技術会議事務局監修2000年版）に従った。

10. 遺構および遺物の写真撮影は、大渕淳志・遠藤啓子・小川和博が行った。

11. 記録および出土遺物は、稲敷市教育委員会が保管している。

12. 発掘調査および報告書の作成に当たり、以下の方々のご教示・ご高配を賜った。記して、深く謝意を表す次第です。(敬称略・順不同)

茨城県教育委員会、(財)茨城県教育財団、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場、
(財)千葉県教育振興財団

本　文　目　次

例言

第Ⅰ章　調査の経緯と経過 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査経過 …… 1

第３節　調査日誌 …… 2

第４節　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2

第１項　遺跡の位置 …… 2

第２項　周辺の遺跡 …… 2

第Ⅱ章　検出された遺構と遺物 …… 9

第１節　概要 …… 9

第２節　基本層序 …… 9

第３節　検出された遺構と遺物 …… 10

第１項　竪穴建物 …… 10

第２項　有段竪穴建物 …… 10

第３項　土坑 …… 13

第４項　溝 …… 13

第５項　柱穴 …… 15

第６項　遺構外出土遺物 …… 19

第Ⅲ章　まとめ …… 21

挿図目次

第１図　沼田貝塚周辺地形図（1:2500）…… 3
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1:25000）…… 5
第３図　遺構配置図 …… 8
第４図　基本層序 …… 9
第５図　竪穴建物ＳＩ01実測図 …… 10
第６図　竪穴建物ＳＩ02実測図 …… 12
第７図　竪穴建物ＳＩ02出土遺物 …… 12
第８図　有段竪穴建物ＳＩ03実測図 …… 14
第９図　有段竪穴建物ＳＩ03出土遺物 …… 15
第10図　土坑ＳＫ01実測図 …… 16
第11図　土坑ＳＫ01出土遺物 …… 16
第12図　土坑ＳＫ02実測図 …… 17
第13図　土坑ＳＫ02出土遺物 …… 17
第14図　溝ＳＤ01実測図 …… 18
第15図　溝ＳＤ01出土遺物 …… 18
第16図　溝ＳＤ02・03実測図 …… 18
第17図　柱穴Ｐ－１・２・３・４実測図 …… 19
第18図　遺構外出土遺物 …… 20
第19図　沼田貝塚近景写真（『江戸崎町史』より）…… 21

原色図版

巻頭図版　沼田貝塚調査区全景　有段竪穴建物ＳＩ03遺物出土状況
有段竪穴建物ＳＩ03出土土器

写真図版目次

PL.１　１．遺跡遠景　２．調査区全景　３．基本層序
PL.２　１．竪穴建物ＳＩ01　２．竪穴建物ＳＩ02・有段竪穴建物ＳＩ03
３．有段竪穴建物ＳＩ03出土遺物　４．竪穴建物ＳＩ02・有段竪穴建物ＳＩ03掘形
PL.３　１．土坑ＳＫ01　２．土坑ＳＫ02　３．溝ＳＤ01
PL.４　１．溝ＳＤ02　２．溝ＳＤ03　３．柱穴Ｐ－１　４．柱穴Ｐ－２　５．柱穴Ｐ－３
６．柱穴Ｐ－４
PL.５　出土遺物　ＳＩ02・03　ＳＫ01・02
PL.６　出土遺物　ＳＤ01 表採資料　沼田貝塚出土貝類（表採資料）

表　目　次

表１　沼田貝塚と周辺遺跡一覧 …… 6
表２　稲敷市貝塚地名表 …… 22

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成21年10月7日付けで、エヌ・ティ・ティ・ドコモ茨城支店（以下「エヌ・ティ・ティ・ドコモ」）より携帯電話基地局建設に伴い、稲敷市教育委員会(以下「教育委員会」)に対して、稲敷市沼田字神田2077番６地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会がなされた。当該地は周知の遺跡である沼田貝塚が所在していることから、教育委員会は遺跡の状況を確認するため、同年10月16日に現地踏査を実施した。事業予定地には土器破片等が小量確認された。この結果を基に同年10月28日、教育委員会は事業者立会の下試掘調査を実施した。バックホウ(0.4)を用いトレンチ試掘調査を行った。

事業予定地の約55％にあたる80㎡程を、現状の地盤から40cm～50cm表土を除去したところで遺構検出面を確認した。試掘調査の結果、事業予定地内からは、住居跡状遺構３・土坑状遺構２・溝状遺構２が確認された。

この試掘調査の結果を基に、今後の対応について同年12月22日付けで、茨城県教育委員会文化課に、文化財保護法第92条第１項に基づく現状保存等についての指導助言を受け、事業計画の変更や遺跡の現状保存が不可能であり遺構保護層の確保が難しいことから、発掘調査を実施し記録保存することとなった。

平成22年１月27日、教育委員会はエヌ・ティ・ティ・ドコモと有限会社日考研茨城との間で発掘調査実施に関する三者協定書を締結し、同年３月１日から３月31日までの期間で現地調査作業と報告書刊行等の内容で発掘調査を実施するに至った。

（稲敷市教育委員会）

第２節　調査経過

沼田貝塚の本調査は、平成22年３月１日から同年３月20日まで実施した。先に実施した試掘調査の結果に基づき、対象開発区域144㎡全面調査となった。

まず平成21年10月28日に行われた事前の試掘調査の結果によると、開発計画地に幅２m、長さ約10mの試掘トレンチ４本設定し、竪穴建物、土坑、溝と推定される遺構と貝層の存在が報告された。これに基づき今回の調査において丁寧な精査を繰り返した結果、試掘調査と同様、黒色土の落ち込みは竪穴建物、土坑、溝、柱穴であることが判明した。これらは調査対象区ほぼ全面間隙なく分布していた。竪穴建物は試掘調査と同じ地点に３軒検出され、いずれも未調査区域に延びていくものの縄文時代中期に比定され、西端で確認されたＳＩ02および03と命名した竪穴建物は重複しており、うち１軒は市内において初見となる有段竪穴建物である。また土坑は２基検出された。やはり縄文時代中期に属し、南西端の土坑ＳＫ02は半分が未調査区域に延びているものの、いわゆる袋状を呈していた。また溝は３条確認され、うち２条は試掘調査においてすでに確認されていたもので、東端の溝ＳＤ01は、もともと明治時代の遺跡名である「土岐屋敷」に関連する中世の区画溝である。そのほか柱穴が４基検出された。出土遺物がなく時期を確定できないが、覆土の状況から判断して中世の柱穴の可能性が高い。そのほか有段竪穴建物ＳＩ03の覆土上層の撹乱層で貝層の一部が確認された。小型のハマグリを主体とする純鹹貝層であった。

また、遺物の出土は、遺構の性格からみても全体的に少ないが、有段竪穴建物から、ほぼ完形に近い縄文時代中期後半・加曾利Ｅ１式の深鉢土器が覆土中から検出されている。そのほかの遺構からは遺物の出土は限られていた。

最後に遺構の希薄である調査区北東隅平坦部に旧石器文化層を確認するため２m×２mのグリッド(ＰＧ01)を設定し深掘調査を実施する。表土層の耕作土下部は黄褐色軟質ローム層となり、周辺地域とほぼ同様な基本層序を示している。また、Ⅲ層は第２黒色帯に相当するにぶい黄褐色ローム層で常総台地における重要な鍵層である。しかし、これら明確な基本層序をもちながら、あいにく旧石器文化層を検出できず、基本層序のみの観察となった。（第４図）

なお、発掘調査の開始に際しては、対象となる区域を総括するように世界測地系に基づく座標を基準とした発掘区の設定を行った。Ｘ＝4,690、Ｙ＝42,600の調査区内北側を起点とし、基本的に一辺10mのグリッドを設定した。しかし、調査範囲が南北12.5m、東西12.0mと限られており、そのなかに改めて小グリッドのような調査区の設定は行っていない。（第３図）

発掘調査は平成22年3月20日確認された全ての遺構を調査し終了した。もっとも注目されるのが有段竪穴建物ＳＩ03である。今回の調査で、一部未調査部分が残ってしまったとはいえ、有段竪穴建物の存在が確認できたことは大きい。しかも唯一完形に近い深鉢である加曾利Ｅ１式土器の出土によって、有段竪穴建物が伝播経路として利根川沿いの茨城県側から千葉県側への南下が明らかになることを期待し、さらに建物の性格を知るうえで重要な調査であったといえよう。

（小川和博）

第３節 調査日誌

２月22～25日　調査準備(調査機材の確認・重機の手配等)、地主および周辺住民への挨拶。
２月26日　調査範囲の確認(現地確認)。
３月１日　重機による表土層除去を開始。遺構検出精査作業を実施。溝ＳＤ01の検出作業。
３月２日　座標測量。溝ＳＤ01、土坑ＳＫ01・02、柱穴Ｐ－01、竪穴建物ＳＩ01～03検出作業。
　　セクション図実測作業。写真撮影。
３月３日　竪穴建物ＳＩ03が有段竪穴建物であることが判明する。柱穴Ｐ－02、溝ＳＤ02検出作業。
　　竪穴建物ＳＩ01・02のセクション図実測作業。竪穴建物ＳＩ01写真撮影。
３月４日　有段竪穴建物ＳＩ03の精査。竪穴建物01・02貼床除去作業。旧石器時代試掘調査。
　　竪穴建物ＳＩ01・02、溝ＳＤ02・03、柱穴Ｐ－03・04平面図実測作業。
３月５日　調査区全体測量を実施。
３月６日　現地周辺区域の踏査。
３月10日　発掘調査終了確認依頼。埋蔵物発見届の提出。
３月18日　発掘現場清掃作業。
３月19日　茨城県教育委員会による現地終了確認を実施。
３月20日　現場の一部(危険箇所)の埋戻し作業を行い、発掘現場作業を完了する。
４月23日　茨城県教育委員会より発掘調査の終了したことが確認される。

（遠藤啓子・大渕淳志・小川和博）

第４節　遺跡の位置と周辺の遺跡

第１項　遺跡の位置（第1・２図）

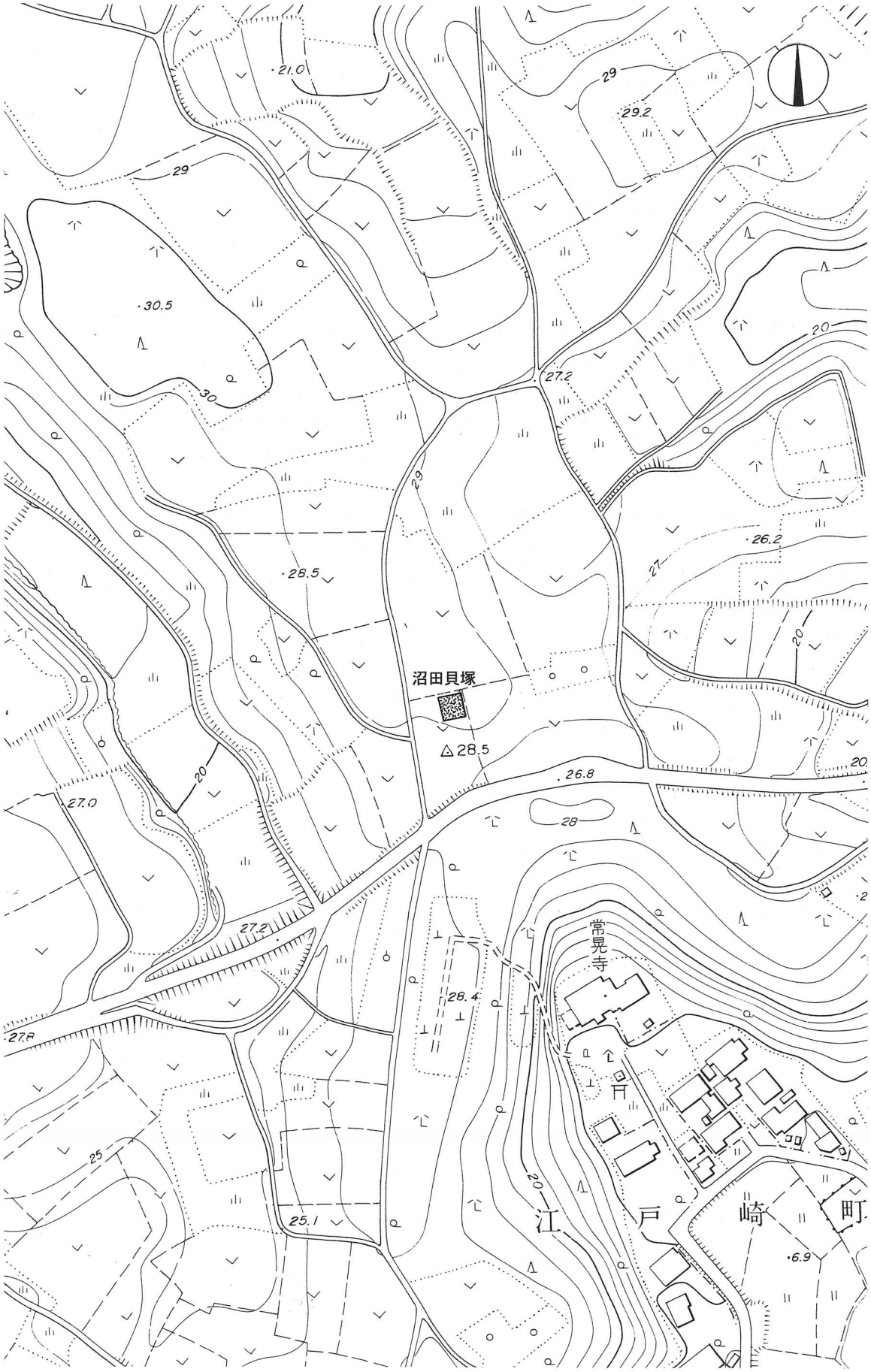
沼田貝塚は、稲敷市の北西側で、沼田字神田2077番６に所在し、稲敷市江戸崎庁舎の西1.6kmの市郊外、北緯35°57′13″8、東経140°17′33″に位置し、標高28.5mの三角点が隣接して設置されている。また西側500m先には首都圏中央連絡自動車道稲敷インターチェンジ料金所が、さらに現在整備中である江戸崎新利根バイパスが北側に開通する。

ここは常総台地北東部に相当し、通称稲敷台地縁辺部に形成された洪積台地上にあたる。付近は南側が龍ケ崎市との境で１級河川小野川の一支流である沼里川の左岸にあたり、北側にはこの沼里川の支流である小河川に挟まれた外見上釣り針状に湾曲した舌状台地が侵食され複雑な地形を呈している。さらに詳細にみると立地する遺跡の周辺は沼里低地から北側へ支谷が小さく入り込み湾状を呈し、反対側は北側を流れる沼里川の一支流からの谷が入り込み、谷頭が南北両側から挟み、台地は西側へ向かって緩傾している。遺跡はこの両谷頭を見下ろす標高28.40mのほぼ平坦部に立地し、かつては周囲に貝層が広く散布していたものの、現在は畑地の開墾等により露呈する貝層を確認することはできない。なお、南側の谷津田との比高差は約21mを測る。

（小川　和博）

第２項　周辺の遺跡（第２図）

平成の市町村大合併によって江戸崎町は桜川村・東町・新利根町が合併し稲敷市となり、これによって遺跡数は増えたとはいえ、総体的にみてまだ十分遺跡が掌握されているわけではない。かつて旧江戸崎町で周知されている遺跡



第１図　沼田貝塚周辺地形図（1：2500）

は166ヶ所あり、10年前まで52ヶ所といわれていたものが３倍以上追加されたことになる。また現在整備中である首都圏中央連絡自動車道は現在稲敷インターチェンジが開通し、さらにそれらに連絡するアクセス道路江戸崎新利根バイパスが一部開通するなど、今後確実に人口が増え、さらに大規模な開発が予想されるなど県内でも注目される地域のひとつでもある。それに伴い新たな遺跡が確認される可能性が高いといえよう。

さて、沼田貝塚が立地する区域は、北東に霞ケ浦、南に沼里川や小野川が流れ、小規模な支台が霞ヶ浦に向かって東西に細長く延びた洪積台地である。ここは幅狭く複雑に開析された舌状台地がいくつも形成され、台地上には縄文時代から近世に至るまでの多くの遺跡が確認されており、とくに縄文時代と古墳時代の遺跡が集中しているのが特徴である。ここで沼田貝塚周辺の遺跡について概観してみたい。

まず旧石器時代は市内全体をみても少なく、周辺では確認することはできないものの、立地する台地が異なるが平成４年にゴルフ場造成に先行して調査された「秋平遺跡(056)」でナイフ形石器が確認されている。

次の縄文時代になると急に遺跡数が増えてくる。周辺では明治時代より知られている「吹上貝塚(005)」「村田貝塚(006)」「台畑貝塚(035)」をはじめ「明神貝塚(004)」「神田道貝塚(014)」「栗山遺跡(045)」「新山遺跡(072)」「大門遺跡(075)」「荒野遺跡(076)」「芝ヶ谷遺跡(077)」「花指遺跡(078)」「赤羽根遺跡(087)」「立通し遺跡(088)」「中道遺跡(097)」「狸崎遺跡(105)」「原南遺跡(107)」「児松遺跡(108)」「堂ノ上遺跡(109)」「塙遺跡(110)」「羽賀栗山遺跡(111)」が周知されており、沼田貝塚に隣接する「大夫屋敷遺跡(016)」では平成21年の調査で中期後半の拠点的集落が明らかにされている。また平成17年に発掘調査した「根崎遺跡(162)」では早期・井草式期から前期終末までの遺物が出土し、同年に調査した「下ノ内遺跡(164)」では前期・黒浜式期の陥穴１基が検出されている。なお、稲敷市内全体をみても明治時代より知られた著名な遺跡が多く、とくに貝塚については学史的にみても特筆されるものがある。なかでも椎塚字中峯に所在する後期の「椎塚貝塚」は明治初期・日本考古学の幕開けとなった東京都の大森貝塚の調査から15年後、明治26年に発掘調査され、ヤスが突き刺さったまま出土した鯛頭骨は縄文時代の漁撈史において欠くことのできない一級資料である。そのほか国指定の土瓶をはじめ鮑形土器、土偶、土版、石棒などはいずれも考古学史上重要な位置付けがされている。一方隣接する対岸の台地上には昭和43年に早稲田大学が調査した「村田貝塚(06)」が位置する。当貝塚は大きく４地点の斜面部に形成された地点貝塚で、南東側の第Ⅰ・Ⅱ地点が中期、西側の第Ⅲ・Ⅳ地点が前期後半という集落移動の明確な貝塚であり、中期については沼田貝塚との関連性が指摘される。

弥生時代は極端に少なく、周辺では「立通し遺跡(088)」「塚本遺跡(096)」が周知されているのみである。なお旧町内では12ヶ所が知られており、調査された集落跡では「楯の台古墳群(022)」、「大日山古墳群(051)」、「思川遺跡(053)」、「秋平遺跡(056)」「根崎遺跡(162)」のほか、「下ノ内遺跡(164)」で弥生時代中期末葉の住居跡が検出されている。

古墳時代になると古墳をはじめ、集落跡も数多く報告されている。周辺では第１図に示した分布図内で半分以上の36ヶ所が所在する。また古墳では平成３年に調査した「土戸古墳(046)」や平成20年に調査した「中城古墳群(040)」のほか、「見晴塚古墳(002)」「亀ヶ谷城古墳(007)」「木納場古墳(009)」「大塚古墳(010)・湮滅」「浅間山古墳群(013)湮滅」「大日古墳(038)」「東前古墳群(047)」「外浦古墳(070)」「亀台古墳群(099)」が所在する。

次の奈良・平安時代の遺跡としては先の江戸崎バイパスに伴い調査された「大夫屋敷遺跡(016)」において集落跡が確認され、そのほか「土戸古墳(046)」でも住居跡が検出されている。なお、隣接する下君山の台地南端に位置する「下君山廃寺(012)」では、とくに常陸国分寺系の素縁複弁十葉軒丸瓦や均整唐草文平瓦等をはじめとする布目瓦が多量に出土し、塔の心礎と想定される平石の存在が明らかにされている。しかも８世紀代の金銅仏の出土も報告されており、「信太郡」の郡衙の推定地として明治時代より指摘されている。また昭和63年に県道新川江戸崎線の道路改良工事に伴い調査された「二の宮貝塚(032)」および「思川遺跡(053)」では集落内から土師器・須恵器のほか、灰釉陶器の平瓶、把手付瓶、緑釉陶器の輪花、さらに唐鏡（瑞花双鳳鏡）の破片の出土が報告されている。

中世になると沼里川や小野川流域の台地上には城跡や砦跡が築かれる。「江戸崎城跡(001)」をはじめ、平成20年に調査した「中城古墳群(040)」に連携する「羽賀城跡(039)」。中峯遺跡(037)」として周知されている「中峰城跡」がある。これらを総合的にみるとこの地が霞ヶ浦の肥沃な土地を背景に、政治的にも中心的な機能をもたらしていたことは疑いない。

（小川　和博）

031沼田貝塚　001江戸崎城跡　002見晴塚古墳　003豆薬師遺跡　004明神貝塚　005吹上貝塚　006村田貝塚　007亀ケ谷城古墳
008荒地古墳　009木納場古墳群　010大塚古墳　013浅間山古墳群　014神田道貝塚　015自穢前遺跡　016大夫屋敷遺跡　035台畑貝塚
037中峰遺跡　038大日古墳　040中城古墳　045栗山遺跡　046土戸古墳　047東前古墳群　065佐倉原遺跡　069佐倉原南遺跡
070外浦古墳　071新山西遺跡　072新山遺跡　073犬塚遺跡　075大門遺跡　076荒野遺跡　077芝ケ谷遺跡　078　花指遺跡
087赤羽根遺跡　088立通し遺跡　089二重堀遺跡　090赤羽根塚　091原久保遺跡　092時崎平遺跡　093宮後遺跡　094沼田庚申塚
095神明平遺跡　096塚本遺跡　097中道遺跡　098沼田遺跡　099亀台古墳群　100柿作台遺跡　101辺田後遺跡　103古橋塚
104狸崎北遺跡　105狸崎遺跡　106原大日遺跡　107原南遺跡　108児松遺跡　109堂ノ上遺跡　110塙遺跡　111羽賀栗山遺跡
112山後古墳　113山後遺跡　114高野遺跡　116観音前遺跡

第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25000）

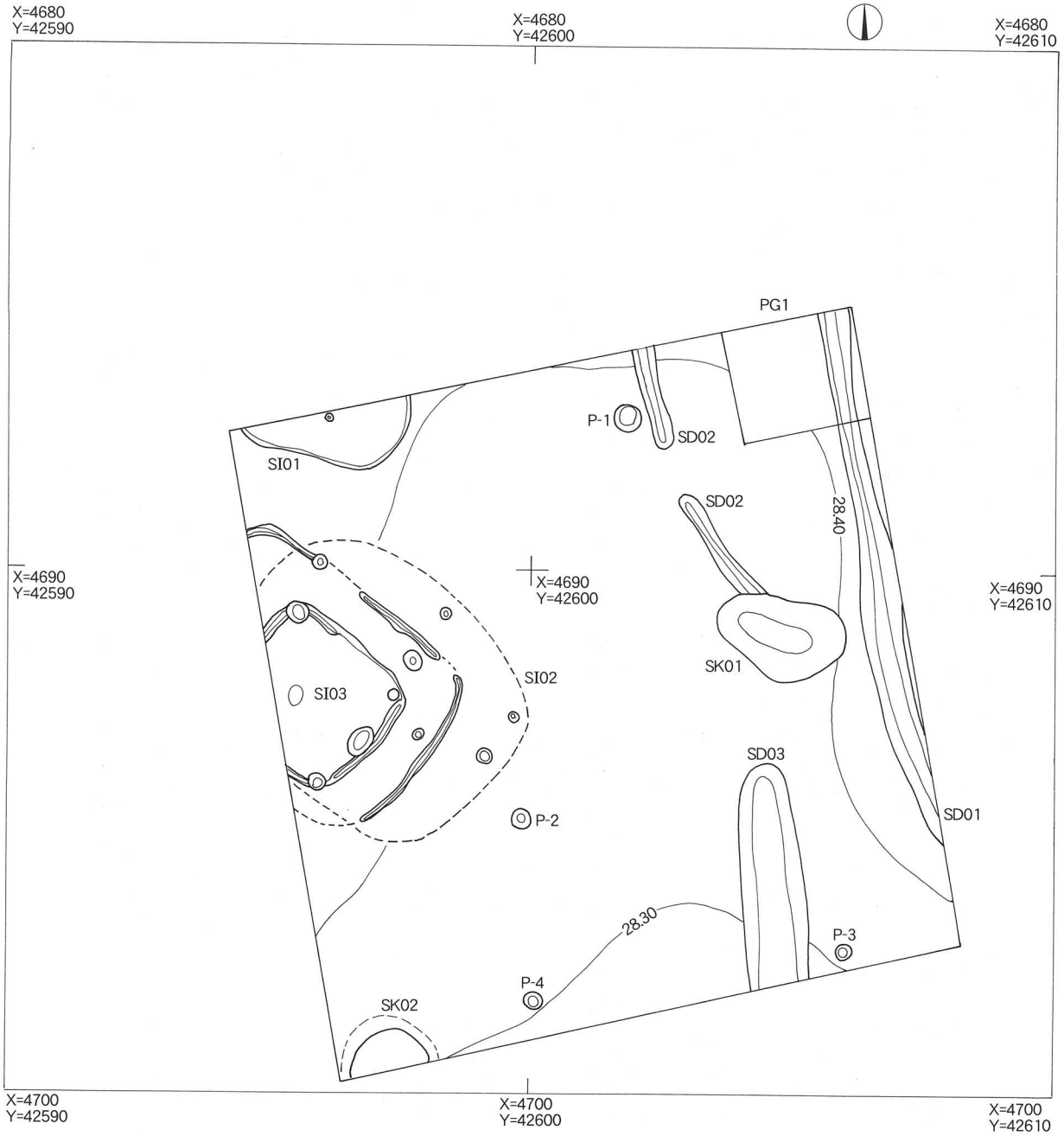
参考文献
八木奘三郎他　1893「常陸国椎塚介墟発掘報告」『東京人類学雑誌』第八巻第八十七巻
酒詰仲男　1959「日本貝塚地名表」土曜会
茨城県史編さん原始古代史部会　1974『茨城県史　考古資料編・古墳時代』茨城県
西村正衛　1981「茨城県江戸崎町村田貝塚（第一次調査）」早稲田大学教育学部『学術研究第30号』
斎藤弘道　1981「茨城県の縄文時代貝塚(1)」茨城県歴史館報８
斎藤弘道　1982「茨城県の縄文時代貝塚(2)」茨城県歴史館報９
西村正衛　1989「18．茨城県江戸崎町村田貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として』早稲田大学出版部
鈴木美治　1991「二の宮貝塚・大日山古墳・思川遺跡－一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財団文化財報告第65集
江戸崎町史編纂委員会　1994『江戸崎町史』江戸崎町
茨城県立歴史館　1994「学術調査報告書．４．茨城における古代瓦の研究」
茨城県　1995『茨城県史　考古資料編・奈良平安時代』
大賀健他　1999「秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚」江戸崎町佐倉地区遺跡発掘調査会
小川和博　2006「根崎遺跡発掘調査報告書」稲敷市埋蔵文化財調査報告書第１集
小川和博　2006「下ノ内遺跡発掘調査報告書」稲敷市埋蔵文化財調査報告書第２集
小川和博　2008「青宿遺跡発掘調査報告書」稲敷市埋蔵文化財調査報告書第３集
野村浩史他　2009「中城古墳群」稲敷市埋蔵文化財調査報告書第５集

（小川和博）

表１　沼田貝塚と周辺の遺跡一覧

番号	遺　跡　名	種別	時代・時期	備　考
０３１	沼田貝塚	包蔵地、貝塚	縄文	2010発掘調査
００１	江戸崎城跡	城館跡	中世、近世	
００２	見晴塚古墳	包蔵地、古墳	古墳	
００３	豆葉師遺跡	包蔵地、古墳	縄文、古墳、中世	
００４	明神貝塚	包蔵地、貝塚	縄文	
００５	吹上貝塚	貝塚	縄文、弥生、古墳	
００６	村田貝塚	貝塚	縄文、古墳、中世	1968早稲田大学発掘調査
００７	亀ヶ谷城古墳	古墳	古墳	
００８	荒地古墳	古墳	古墳	
００９	木納場古墳群	古墳群	古墳	
０１０	大塚古墳	古墳	古墳	湮滅
０１３	浅間山古墳群	古墳群	古墳	湮滅
０１４	神田道貝塚	包蔵地、貝塚	縄文	
０１５	自穢前遺跡	包蔵地、古墳群	古墳、奈良・平安、中世	
０１６	大夫屋敷遺跡	包蔵地、古墳	古墳、奈良・平安	2010発掘調査
０３５	台畑貝塚	貝塚	縄文、古墳	
０３７	中峰遺跡	包蔵、古墳、城跡	縄文、古墳、奈良・平安、中世	2007発掘調査
０３８	大日古墳	古墳	古墳、中世	
０４０	中城古墳群	古墳	古墳、中世	2008発掘調査
０４５	栗山遺跡	包蔵地、古墳群	縄文、古墳	
０４６	土戸古墳	古墳、集落	縄文、古墳、奈良・平安	1991発掘調査　湮滅

番号	遺　跡　名	種別	時代・時期	備　考
０４７	東前古墳群	古墳群	古墳	2007発掘調査
０６５	佐倉原遺跡	包蔵地	古墳、奈良・平安	
０６９	佐倉原南遺跡	包蔵地生産遺跡	古墳	
０７０	外浦古墳	古墳	古墳	
０７１	新山西遺跡	包蔵地、古墳	古墳、奈良・平安、中世	
０７２	新山遺跡	包蔵地	縄文	
０７３	犬塚遺跡	土塁、塚	中世、近世	
０７５	大門遺跡	包蔵地	縄文、古墳	
０７６	荒野遺跡	包蔵地	古墳	
０７７	芝ヶ谷遺跡	包蔵地	縄文、古墳	
０７８	花指遺跡	包蔵地	縄文、古墳	
０８７	赤羽根遺跡	包蔵地	縄文、古墳	
０８８	立通し遺跡	包蔵地	縄文、弥生	
０８９	二重堀遺跡	防塁	中世	
０９０	赤羽根塚	塚	近世	
０９１	原久保遺跡	包蔵地	古墳	
０９２	時崎平遺跡	包蔵地、貝塚	古墳	
０９３	宮後遺跡	包蔵地	古墳	
０９４	沼田庚申塚	塚	近世	
０９５	神明平遺跡	包蔵地	古墳	
０９６	塚本遺跡	包蔵地、古墳群	弥生、古墳、奈良・平安	2007発掘調査
０９７	中道遺跡	包蔵地	縄文、古墳、奈良・平安、中世	
０９８	沼田遺跡	城館跡	中世	
０９９	亀台古墳群	古墳群	古墳	
１００	柿作台遺跡	包蔵地、貝塚	古墳、奈良・平安	
１０１	辺田後遺跡	包蔵地	古墳、奈良・平安	
１０３	古橋塚	塚	近世	
１０４	狸崎北遺跡	包蔵地	古墳	
１０５	狸崎遺跡	包蔵地、貝塚	縄文、古墳	
１０６	原大日遺跡	塚	近世	
１０７	原南遺跡	包蔵地、貝塚	縄文	
１０８	児松遺跡	包蔵地、貝塚	縄文、古墳	2009発掘調査
１０９	堂ノ上遺跡	包蔵地、貝塚	縄文、古墳	2007発掘調査
１１０	塙遺跡	包蔵地、貝塚	縄文、中世	
１１１	羽賀栗山遺跡	包蔵地	縄文	
１１２	山後古墳	古墳	古墳	
１１３	山後遺跡	防塁	中世	
１１４	高野遺跡	墓地	中世	
１１６	観音前遺跡	包蔵地	奈良・平安、中世	



第３図　遺構配置図

0　5m

第Ⅱ章　検出された遺構と遺物

第１節　概要（第３図）

沼田貝塚は、現稲敷市の西部、沼里川左岸の標高28.5mの谷頭部上に所在する。ここは北側に支谷が小さく入り込んだ台地の縁辺で、しかも反対の北側の東西に流れる沼里川の支流の谷が入り込み、谷頭が南北両側から挟まれた緩傾斜部に遺跡が展開している。今回の調査は確認調査の結果に基づき、開発対象区域の全面144㎡が対象となっており、ここから縄文時代の竪穴建物２軒、有段竪穴建物１軒、土坑２基、柱穴４基のほか、中世の溝１条、時期不明の溝２が検出された。竪穴建物２軒は未調査区域に延びており、完掘できないものの、縄文時代中期中葉から後半に比定される。また有段竪穴建物も一部未調査区域に延び、その全容を把握できていないが、長方形を呈し、下段の四隅に柱穴を伴う典型的な有段竪穴建物である。土坑は２基検出され、うち１基は楕円形ながら覆土の状況などから縄文時代に比定されよう。もう一基は縄文時代中期のいわゆる袋状を呈している。また溝は３条検出されており、うち調査区東端の南北に走る溝ＳＤ01と柱穴４基は中世に比定される。

第２節　基本層序（第４図）

今回の調査で、旧石器時代に係る文化層を確認するために、深掘調査を実施した。遺構の希薄である調査区北東隅に２×２ｍのグリッド(ＰＧ１)を設定して調査した。あいにく明確な旧石器文化層や遺物は検出できなかったものの、市内の資料蓄積としてローム層の調査を行い、今後の調査の資料に供したい。設定した地点はほぼ台地平坦部で、Ⅳ層褐色ローム層である第2黒色帯が鍵層となっている。

Ⅰ層　灰黄褐色層(10YR4/4)　耕作土層。締りがなく、粘性に欠ける。

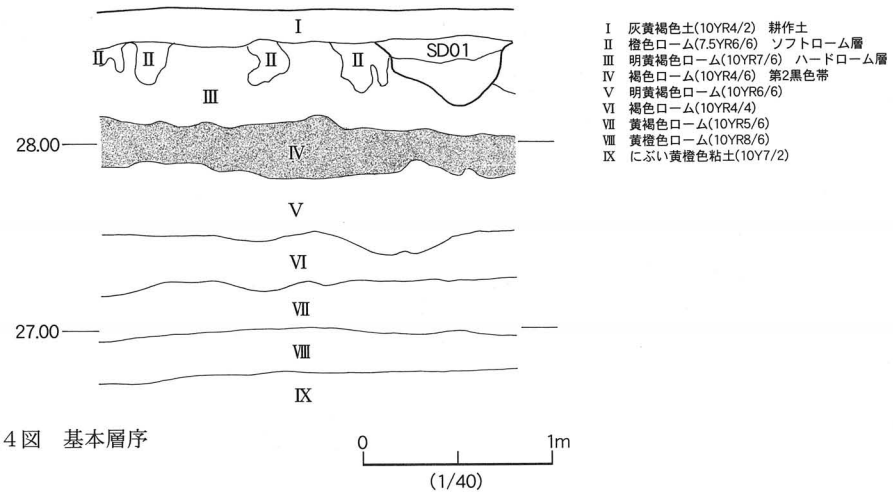
Ⅱ層　橙色土ローム層(7.5YR6/6)　ソフトロームである。軟弱である。大半が耕作時において削平され、締りにやや欠け、粘性は普通である。

Ⅲ層　明黄褐色ローム層(10YR7/6)　やや明るいハードローム層。堅緻で締りがある。層厚は40cm前後を最大層厚とする。ＡＴ層に相当するものと考えられる。

Ⅳ層　褐色ローム層(10YR4/6)　第２黒色帯に相当するものと思われる。締りがある。層厚は20～35cmを測る。赤色粒子・炭化粒子を少量含む。

Ⅴ層　明黄褐色ローム層(10YR6/6)　上層よりも明るいが全体的に暗いハードローム層。締りがある。層厚は25～35cm前後としっかりした層位を示す。赤色粒子を微量含む。

Ⅵ層　褐色ローム層(10YR4/4)　明るいハードローム層。堅緻で締りがある。層厚は15～30cm前後と安定している。白色粒子を少量含む。



第４図　基本層序

Ⅶ層　黄褐色ローム層(10YR5/6)　締りがあり、粘性が強い。層厚は25～30cm前後としっかりした層位を示す。白色粒子を少量含む。

Ⅷ層　黄橙色ローム層(10YR8/6) 締りがあり、粘性が強い。層厚は20cm前後としっかりした層位を示す。炭化粒子を少量含む。立川ローム最下層に相当するものと思われる。

Ⅸ層　にぶい黄橙色粘土層(10Y7/2)締りがあり、粘性にとむ。

（小川和博）

第３節　検出された遺構と遺物

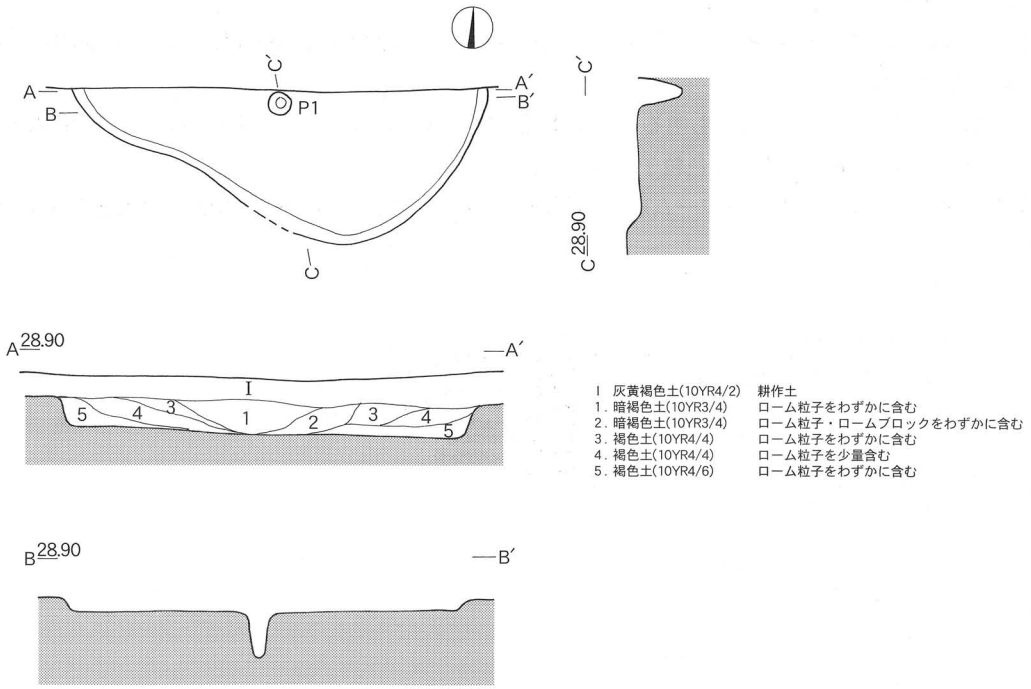
第１項　竪穴建物（第5～７図）

１　竪穴建物ＳＩ01（第５図）

調査区北西隅に位置する。立地する標高は28.38m。北側約半分が未調査区域に延びている。検出された東西辺はほぼ直線的で2.60m、南北辺は緩いカーブを描き1.5mと東西にやや長い楕円形を呈するものと推定される。東西軸を通る主軸方位はＮ－69°－Ｗを指す。壁高は23.0cmを測り、緩く外傾して立ち上がり、比較的良好な掘り込みである。床面は平坦で、僅かに貼床部が検出できた。壁溝は構築されていない。柱穴は中央近くに１本検出された。大きさは径27.0×30.0cm、深さは39.1cmを測る。炉跡は確認できなかった。竪穴覆土は５層に分層可能で上層が暗褐色土、周辺から床面までが褐色土で覆われており、レンズ状の堆積状態を示す自然堆積層である。なお、本跡から遺物の出土しないが、覆土の状況から判断して縄文時代中期に比定される。

２　竪穴建物ＳＩ02（第６・７図）

調査区北西側に位置する。立地する標高は28.345m。大半がＳＩ03によって切られ、東側壁面は耕作により削



第５図　住居跡SI01実測図

0　2m
(1/60)

平され、さらに西側の一部が未調査区域に延びており、明確な形状を把握できないが、炉跡と一部残存している床面および柱穴の配置により不確実ながら計測は可能である。確認できる東西軸4.75m、南北軸5.80mと南北に長い楕円形を呈するものと推定される。南北軸を通る主軸方位はN－50°－Wを指す。壁高は耕作によって削平され、西側の断面においても明瞭な立ち上がりが確認できなかった。床面は直床でほぼ平坦である。壁溝は構築されていない。炉は検出面の中央東側に位置し、有段竪穴建物ＳＩ03の上床面下で検出された。大きさは径35.0cm×42.0cm、深さ2.2cmの楕円形を呈し、掘形は浅い摺鉢状で、炉底面は火熱により堅緻で赤化し、覆土に赤褐色の焼土粒が堆積していた。柱穴は壁際に主柱穴となるＰ１～Ｐ４の４本と建物内側中央にＰ５の１本の合計５本が検出された。大きさは下記のとおりで、いずれも円形を呈し、径28cm前後を測るものの、深さについては16.4～62.3cmとばらつきがみられる。建物覆土は耕作による削平のため明瞭ではないが、床面上は暗褐色土で覆われていたようである。出土遺物から中期・阿玉台後半期に比定される。

柱穴計測値（単位cm）

	短径×長径	深さ		短径×長径	深さ		短径×長径	深さ		短径×長径	深さ
P1	26×30	16.4	P2	29×31	27.8	P3	28×30	24.2	P4	27×28	26.7
P5	17×24	62.3									

薄層の覆土中より出土した土器は中期の土器３点を図示できた。第７図１は深鉢形土器の胴部破片。隆帯区画文に沿って二列の角押文を施文する。胎土に石英、長石粒を含む。阿玉台Ⅱ式。2は平縁の深鉢形土器。口縁部上位に単節ＲＬの縄文帯を区画文する。区画内に爪形文を沿い一本描き沈線文を充填する。胎土に石英、長石、黒色粒子を含む。阿玉台Ⅲ式。３は平縁の深鉢形土器。口縁部破片である。口縁部に単節ＲＬ縄文を施文した隆帯による楕円形区画文を構成する。区画内には、一本描き沈線文が沿う。さらに沈線区画内に波状文を充填している。胎土に石英、長石、黒色粒子を含む。阿玉台Ⅳ式。

第２項　有段竪穴建物（第８・９図）

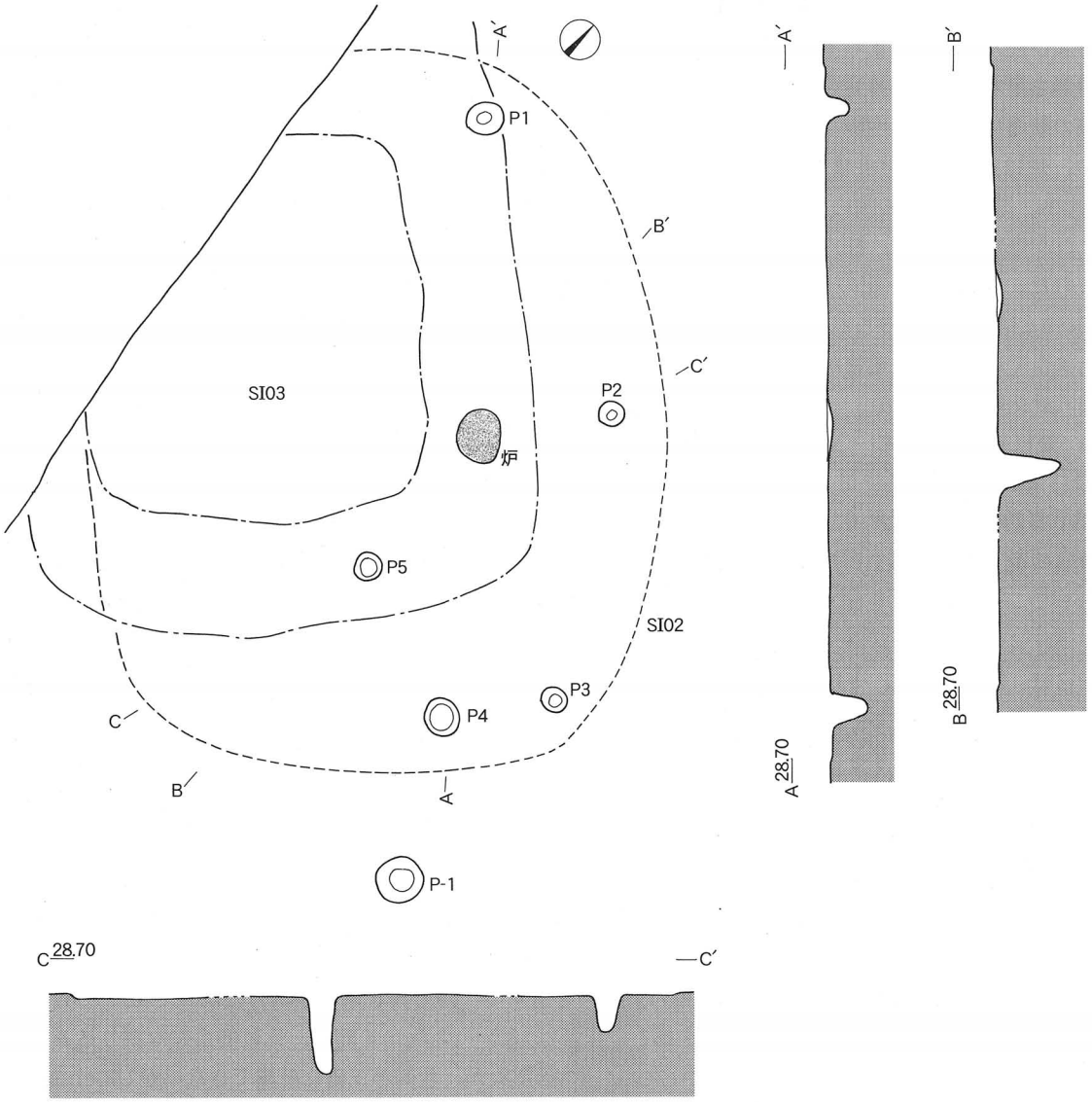
１　有段竪穴建物ＳＩ03（第８・９図）

調査区北西側に位置する。立地する標高は28.37m。竪穴建物ＳＩ02を切り、西側約１/３が未調査区域に延びている。上床部と下床部を伴う有段竪穴建物で、確認された上床部の南北軸5.5m、東西軸4.15m。下床部は南北3.17軸m、東西軸2.75mを測り、南北に長い長方形を呈する。南北軸を通る主軸方位はN－48°－Wを指す。壁高は確認面と上床部の比高差はなく、上床部と下床部は13.5～23.5cmを測り、比較的良好な掘り込みで、ほぼ垂直気味に立ち上がる。上床部の幅は南側が73cm、東側が68cm、北側が正確に計測できないが150cm前後である。上・下床部ともに平坦で、僅かに貼床部が検出できた。壁溝は上床部と下床部で検出されており、上床部では全周していたものが、耕作により部分的に削平されたものと推定でき、幅6.0～21.5cm、深さ5.5～8.7cmを測る。また下床部は検出部において東壁を除き掘削されている。幅9.0～21.0cm、深さ5.0～10.5cmである。柱穴は下床に４本検出された。うち３本は下床部の隅に設置された隅柱である。大きさは下記のとおりで、隅柱３本は径24～41cm、深さは38.1～76.9cmとしっかり掘削している。また南壁際中央に楕円形を呈した土坑状の柱穴が穿ってあり、入り口部施設と推定される。因みに径38.0×61.0cm、深さ6.1cmで、底面は平坦がなく鍋底状である。また掘り込みの明瞭な炉跡は確認できないが、径2.6×3.5cmの楕円形状の焼土跡が下床部北側で確認された。建物覆土は４層に分層可能で、ほぼ全面褐色土で覆われ、床面および壁際に暗褐色土が堆積するレンズ状を示す自然堆積層である。出土遺物より判断して中期後半・加曽利Ｅ１式期に比定される。

柱穴計測値（単位cm）

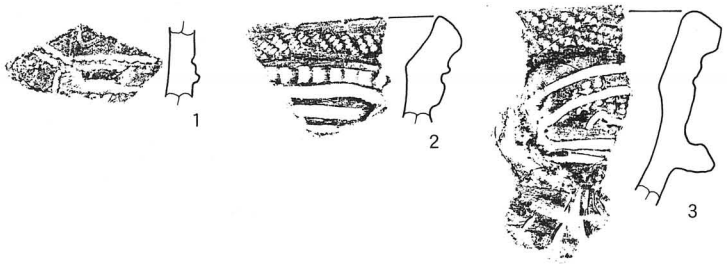
	短径×長径	深さ		短径×長径	深さ		短径×長径	深さ		短径×長径	深さ
P1	40×41	76.8	P2	24×25	60.2	P3	30×31	38.1	P4	38×61	6.1

第９図１は入り口部施設であるＰ４の上面覆土中より出土した土器。中期後葉・加曽利Ｅ１式期の土器で、深鉢形土器のほぼ完形品である。器形は括れのない底部から直線的に外傾する筒形を呈する。最大径を口縁部にもち、口径20.5cm、器高27.4cm、底径19.0cmを測る。口縁部は折り返し口縁で、折り返し部は幅2.5～3.0cmの無文帯



第６図　住居跡SI02実測図

0　2m
(1/60)



第７図　住居跡SI02出土遺物

0　10cm
(1/3)

である。胴部は単節ＲＬ縄文を縦位回転させる。また内面口縁部下位は肥厚し、有段となる。胎土に石英・長石粒を含む。２は深鉢形土器の胴部破片。単節ＲＬ縄文を施文する。胎土に石英・長石粒を含む。加曽利Ｅ１式土器。

第３項　土坑（第10～13図）

１　土坑ＳＫ01（第10・11図）

調査区東側、標高28.11～28.35mに位置し、ＳＤ01・02に切られている。規模は上場長軸2.58m、短軸1.55m。底面長軸1.65m、短軸0.77mで、主軸方位はＮ－84－Ｗの南北に長い楕円形を呈し、深さ54.9cmを測る。底面は平坦部が少なく、起伏をもち、壁は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土と黄褐色土の互層で８層からなる人為的埋戻し土層である。遺物は、小破片の縄文土器で阿玉台Ｉb・Ⅱ式、加曽利Ｅ１・２式期の土器が出土しており、本跡の時期は中期後半・加曽利Ｅ２式期と推定される。

第11図１は深鉢形土器の口縁部破片。口唇部に爪形文を廻らす。体部は無文である。胎土に金雲母・石英・長石粒を含む。阿玉台Ｉb式。２は深鉢形土器の胴部破片。隆帯に沿って二列の角押文を施す。施文具は先を二叉にした工具を用いる。胎土に金雲母・石英・長石粒を含む。阿玉台Ⅱ式。３は深鉢形土器の口縁部破片。縄文施文に平行沈線に挟まれた隆帯を区画文とする。縄文原体は単節ＲＬである。胎土に石英・長石粒を含む。加曽利Ｅ１式。４は縄文施文の深鉢形土器の胴部破片。単節ＲＬを施文する。胎土に黒色粒子・石英・長石粒を含む。加曽利Ｅ１式。５・６は同一個体と推定されるキャリパー形の深鉢形土器。口縁部文様帯は隆帯に沿って沈線文による渦巻文と楕円形区画文を描出する。胴部文様帯は口縁部文様帯直下から二本一組の懸垂文を垂下させ、沈線間を磨消す。地文は単節ＲＬ縄文。胎土に黒色粒子・石英・長石粒を含む。加曽利Ｅ２式。

２　土坑ＳＫ02（第12・13図）

調査区南西側、標高28.26mに位置し、南側半分は未調査区域に延びている。規模は円形を呈するものと推定され、検出部の上場長1.48m、底面長1.68m、深さ34.0cmを測り、また底面は平坦で、壁は内傾して立ち上がる。本跡は底面が上場より15.0cmほど広がるいわゆる袋状土坑である。覆土は上層が黒褐色土を主とし、下層は褐色土を主とする６層からなる自然堆積層である。遺物は、覆土中より阿玉台式期初期段階の土器が出土しており、本跡の時期は中期中葉・阿玉台式期と推定される。

第13図１は深鉢の胴部破片、一列の角押文による意匠文で、「Ｙ」字状の連携文であろうか。胎土に石英、長石粒を含む。阿玉台Ｉb式期。２は深鉢の底部破片。径10.8cmを測る。胎土に金雲母、石英、長石粒を含む。阿玉台式期に比定される。

第４項　溝（第14～16図）

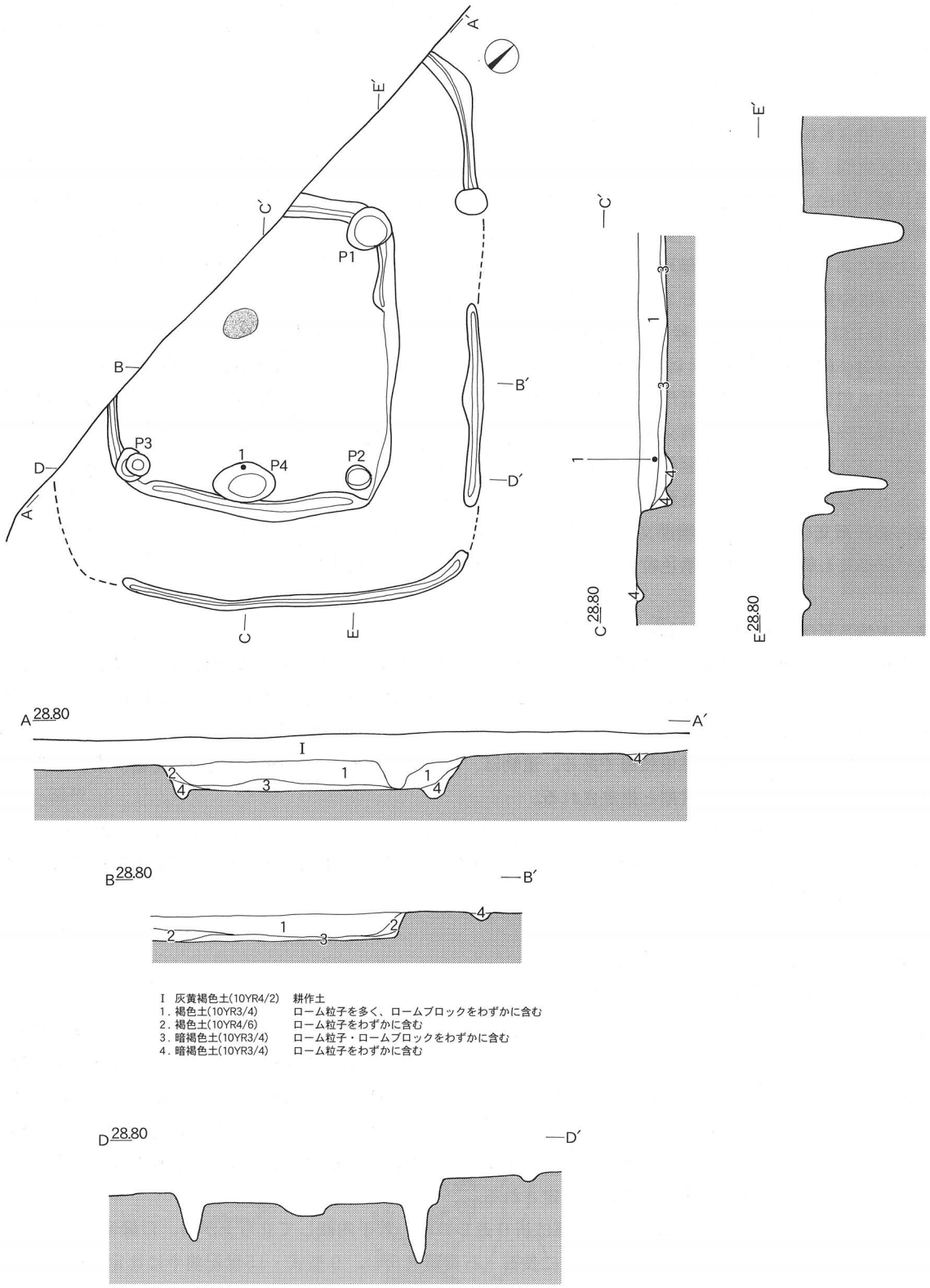
１　溝ＳＤ01（第14・15図）

調査区東端、標高28.20mに位置する。南北に走る溝で、北および南側は未調査区域に延びており、検出は部分的である。屈曲部はなくほぼ直行している。また底面は平坦部がなく、横断面がＵ字状を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。確認できる長さ10.32m、溝上幅28.0～47.5cm、法高12.25～15.0cm、底幅10.0～29.0cmを測る。走行する方位はＮ－12°－Ｗを指し、わずかに北側が高く、南側が低くなっており、その比高差は13cm前後である。覆土は２層確認でき、自然堆積であろう。なお、水が流れた痕跡は確認できなかった。遺物として中世・常滑の甕口縁部破片が出土しており、本跡は中世に比定される。

第15図１は常滑・甕の口縁部破片。口縁部は折り返し口縁。若干内傾して立ち上がる。口縁帯の幅がやや広く、頚部に密着している。焼き締めは普通。胎土に長石・石英粒を含む。９型式・15世紀前半に比定される。

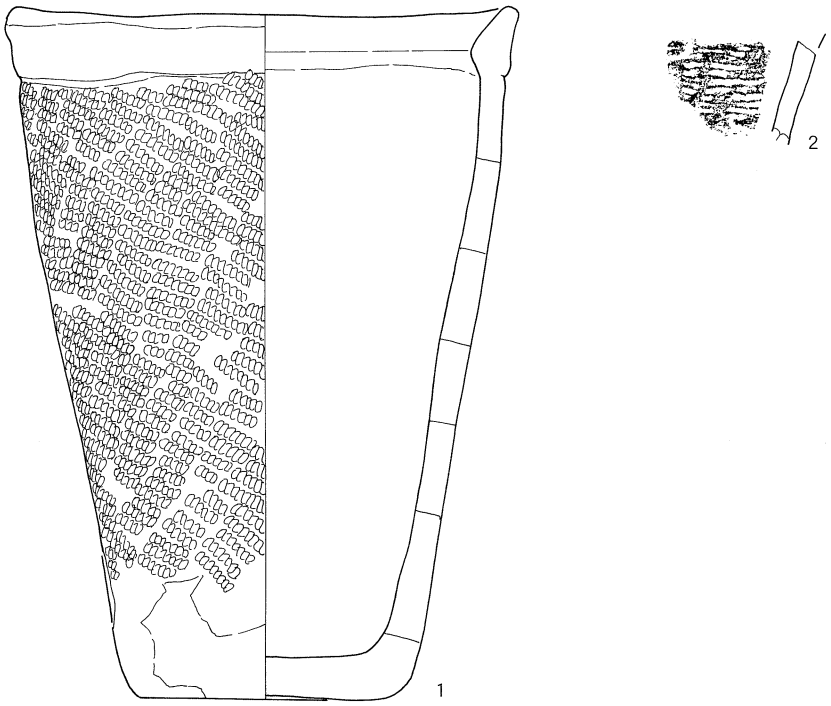
２　溝ＳＤ02（第16図）

調査区北東側、標高28.50mに位置する。南北に走る溝で、北側が未調査区域に延びており、検出は部分的である。走行は弧状気味に湾曲しており、底面は平坦部がなく、横断面がＵ字状を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。また途中間欠している。確認できる長さ5.1m、溝上幅31.0～50.0cm、法高10.0～17.1cm、底幅10.0cmを測る。



第８図　有段竪穴SI03実測図

0　2m
(1/60)



第９図　有段竪穴SI03出土遺物

0　10cm
(1/3)

走行する方位はN－24°－Wを指し、わずかに北側が高く、南側が低く、その比高差は８cm前後である。なお、水が流れた痕跡は確認できなかった。しかも遺物の出土もなく、構築時期も不明であるが、覆土の状況から判断して近世以降となろう。

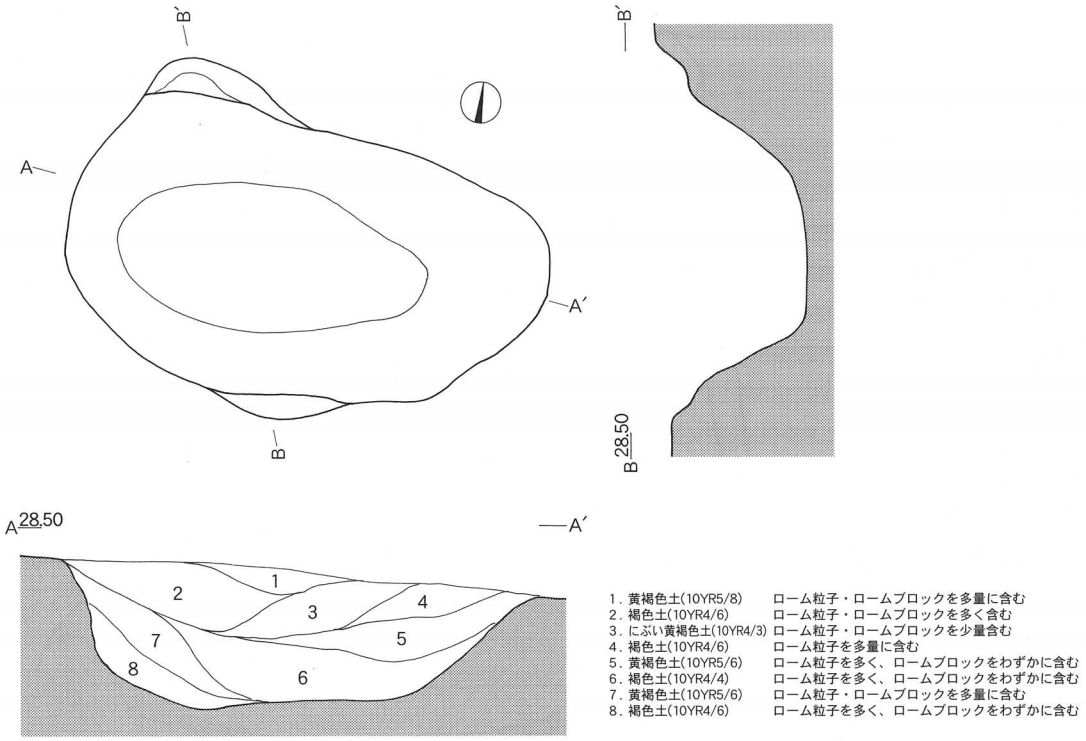
３　溝ＳＤ03（第16図）

調査区南東側、標高28.32mに位置する。東西に走る溝で、南側が未調査区域に延びており、検出は部分的である。直線に走行している。また底面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。検出した長さ4.25m、溝上幅1.18m、法高12.5cm、底幅89.0cmを測る。走行する方位はN－03°－Wを指し、南北端の比高差ほとんどない。なお、本跡北側で結尾するものと推定される。覆土は２層確認でき、自然堆積であろう。また、水が流れた痕跡は確認できなかった。構築時期は遺物の出土はないものの、覆土の状況から溝ＳＤ01に酷似していることから中世に比定される。

第５項　柱穴（第６・17図）

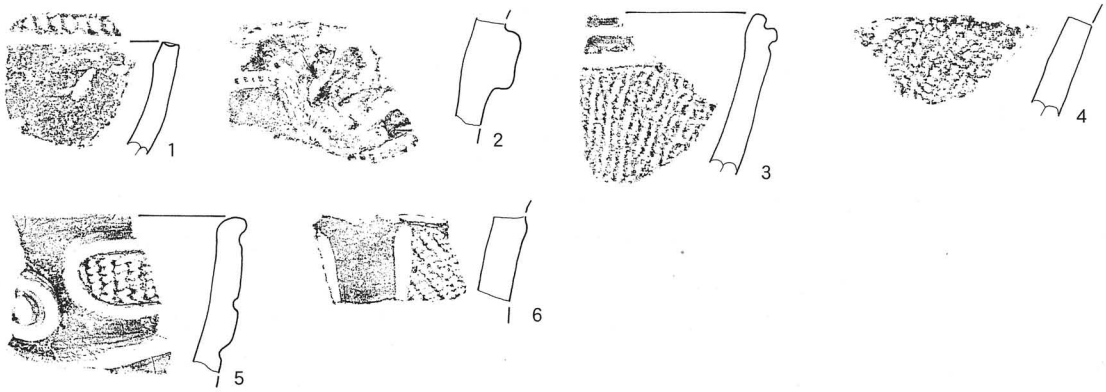
１　柱穴Ｐ－１（第６・17図）

調査区北東側、標高28.36mに位置している。規模は上場長軸62.4cm、短軸60.0cmの円形で、深さ60.0cmを測る。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦であたりは確認できなかった。覆土は暗褐色土を主とする自然堆積層である。遺物の出土はないが、覆土の状況から判断して中世であろう。



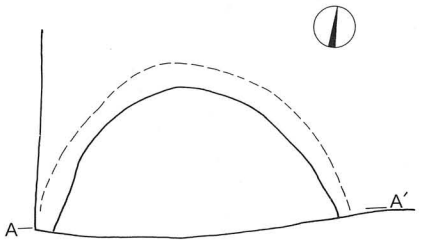
第10図　土坑SK01実測図

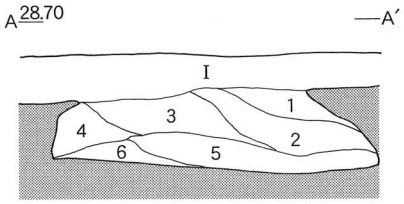
0　1m
(1/40)



第11図　土坑SK01出土遺物

0　10cm
(1/3)

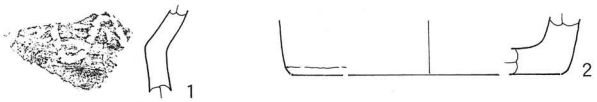




Ⅰ 灰黄褐色土(10YR4/2)　耕作土
1．にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒子・ロームブロックをわずかに含む
2．黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子・ロームブロックをわずかに含む
3．黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子・ロームブロックをわずかに含む
4．にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒子をわずかに含む
5．褐色土(10YR/6)　ローム粒子・ロームブロックをわずかに含む
6．暗褐色土(10YR3/4)　ローム粒子・ロームブロックをわずかに含む

第12図　土坑SK02実測図

0　1m
(1/40)



第13図　土坑SK02出土遺物

0　10cm
(1/3)

2　柱穴Ｐ－２（第17図）

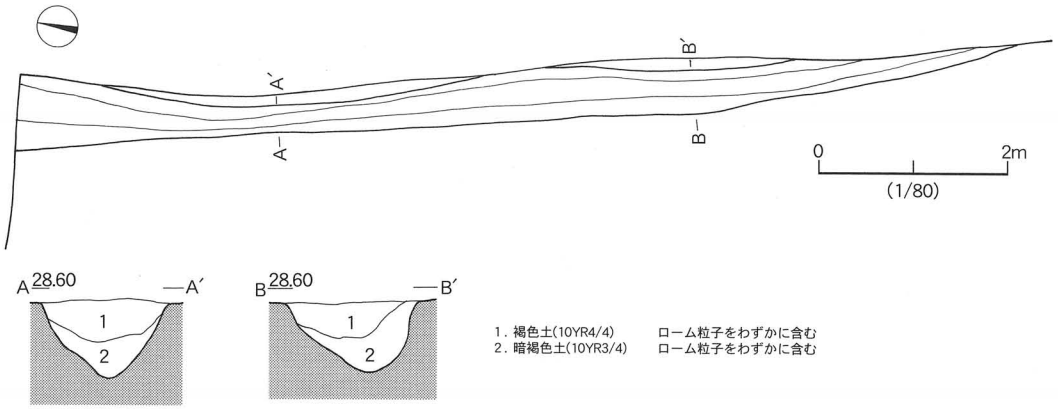
調査区中央南西側、標高28.30mに位置している。規模は上場長軸38.0cm、短軸37.0cmの円形で、深さ14.0cmを測る。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦であたりは確認できなかった。覆土は暗褐色土を主とする自然堆積層である。遺物の出土はないが、覆土の状況から判断して中世であろう。

3　柱穴P－3（第17図）

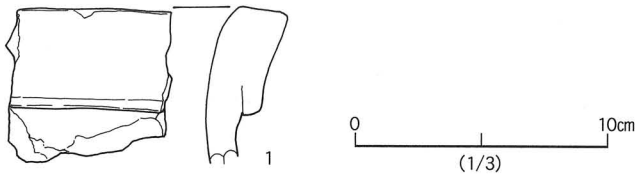
調査区南側、標高28.0mに位置している。規模は上場長軸33.0cm、短軸32.0cmの円形で、深さ42.5cmを測る。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦であたりは確認できなかった。覆土は暗褐色土を主とする自然堆積層である。遺物の出土はないが、覆土の状況から判断して中世であろう。

4　柱穴P－4（第17図）

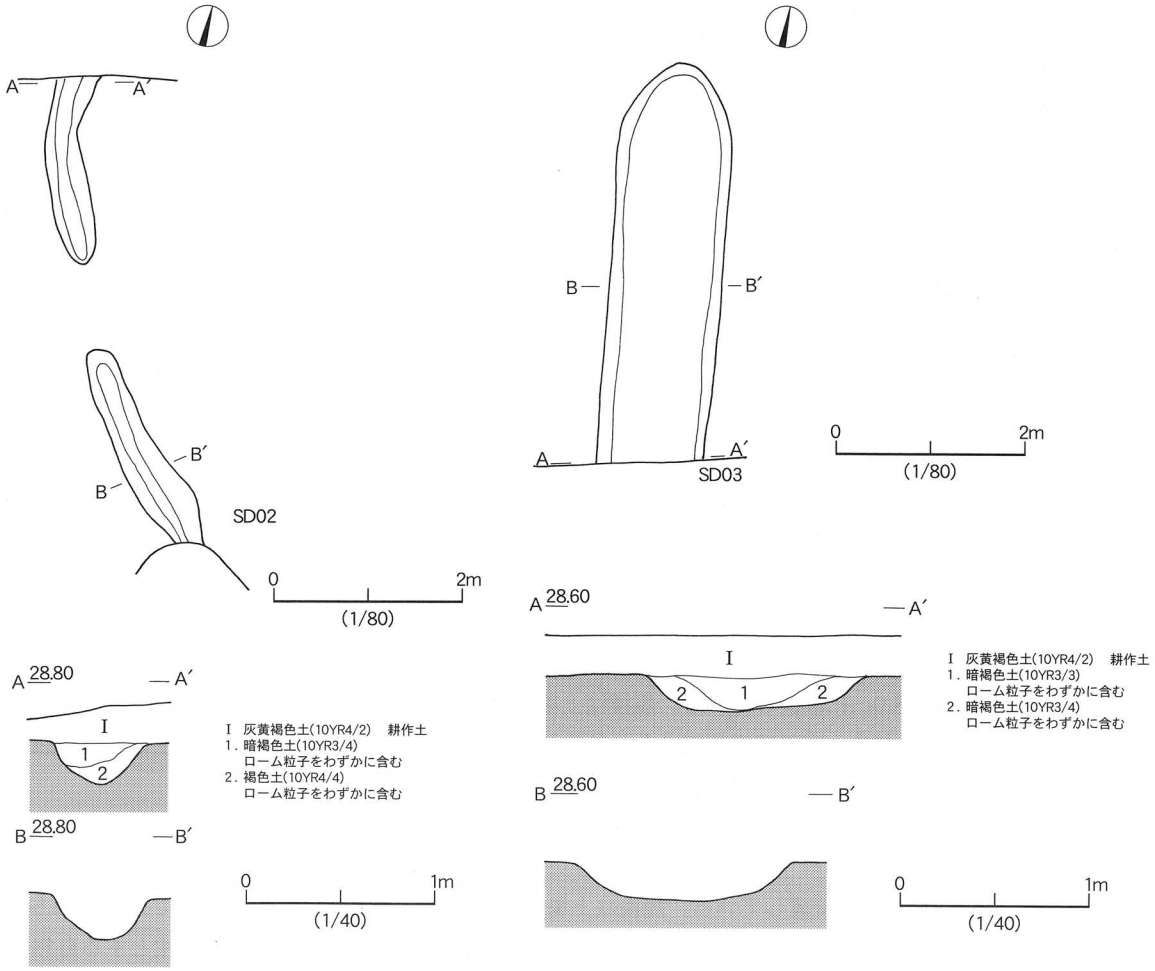
調査区側、標高28.05mに位置している。規模は上場長軸41.0cm、短軸35.0mの楕円形で、深さ78.5cmを測る。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦であたりは確認できなかった。覆土は暗褐色土を主とする自然堆積層である。遺物の出土はないが、覆土の状況から判断して中世であろう。



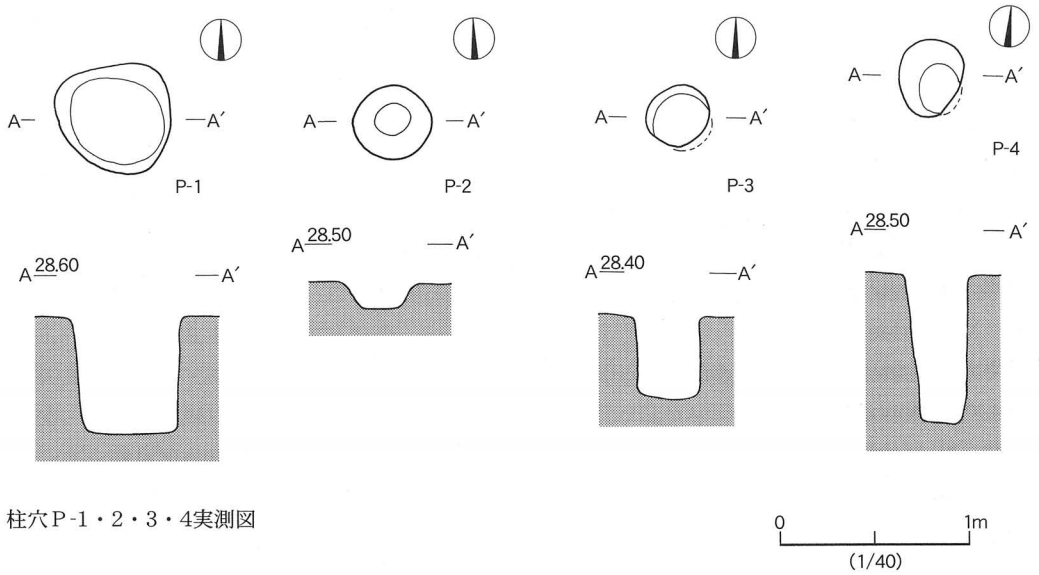
第14図　溝SD01実測図



第15図　溝SD01出土遺物



第16図　溝SD02・03実測図



第17図　柱穴Ｐ-1・2・3・4実測図

第６項　遺構外出土遺物（第18図）

本遺跡の遺構外から出土した遺物は、縄文土器、磨石、貝類である。貝類は有段竪穴建物ＳＩ03の上面撹乱層から比較的まとまって出土した。

１　縄文土器（第18図）

縄文土器は６点を図示した。１は深鉢形土器の胴部破片。アナダラ属の貝殻腹縁による刻目が施されている。胎土に雲母・石英・長石粒を含む。中期・阿玉台Ｉb式。２は深鉢形土器の胴部破片。沈線で挟まれた隆帯区画文に単節ＲＬ縄文を施文する。胎土に石英・長石粒を含む。中期・加曾利Ｅ１式。３は深鉢形土器の胴部破片。沈線区画文に単節ＬＲ縄文を充填する。胎土に石英・長石粒を含む。中期・加曾利Ｅ１式。４は深鉢形土器の胴部破片。ヘラ状工具による条線文。胎土に石英・長石粒を含む。５は浅鉢形土器の口縁部破片。口唇部が肥厚し、わずかに外反する。内面ともに無文地に赤彩が施されている。胎土に金雲母・石英・長石粒を含む。阿玉台式期に比定される。６も浅鉢形土器の口縁部破片。口唇部断面が尖り、くの字状に短く外反する。内面ともに無文地に赤彩が施されている。胎土に金雲母・石英・長石粒を含む。阿玉台式期に比定される。

２　石器（第18図７）

７は砂岩製の磨石の破片。長さ6.751cm、幅7.028cm、厚さ2.535cm、重量148.0gを測る。円礫素材とし、礫面の縁辺部に磨痕が認められる。

３　貝類（ＰＬ６）

本遺跡において、明瞭な貝層は確認できなかったものの、有段竪穴建物上層の撹乱層から比較的まとまった貝殻が検出された。また調査区周辺からもわずかであるが、貝類を採集することができた。ここでは撹乱層および表面採集された貝類をまとめておく。

採集された貝類はわずかに４種である。有段竪穴建物上面撹乱層からは小型のハマグリがまとまっており、シオフキガイ、マガキ、アカニシが混入していた。撹乱層とはいえ、本跡が中期・加曾利Ｅ１式期に比定されており、少なくとも加曾利Ｅ１式段階では鹹水域の環境が推定される。

なお、まとまっているハマグリの大きさは殻長2.38cm から4.24cm、殻高32.09cmから3.55cm殻があり、全体的には殻長3.0cm以下、殻高2.5cm以下の小型ハマグリが目立つ。またシオフキガイの大きさは殻長3.80cmから

3.95cm、殻高3.25cmから3.35cmがあり、ハマグリに比べやや大型である。そのほかにマガキやアカニシは破片であり、残存状況は不良で計測は不可能であった。

出土貝類遺体種名

二枚貝綱　Class Scaphopoda

イタボガキ科　Ostreidae

マガキ　*Crassostrea gigas*

マルスダレガイ科　Veneridae

ハマグリ　*Meretrix lusoria*

バカガイ科　Mactridae

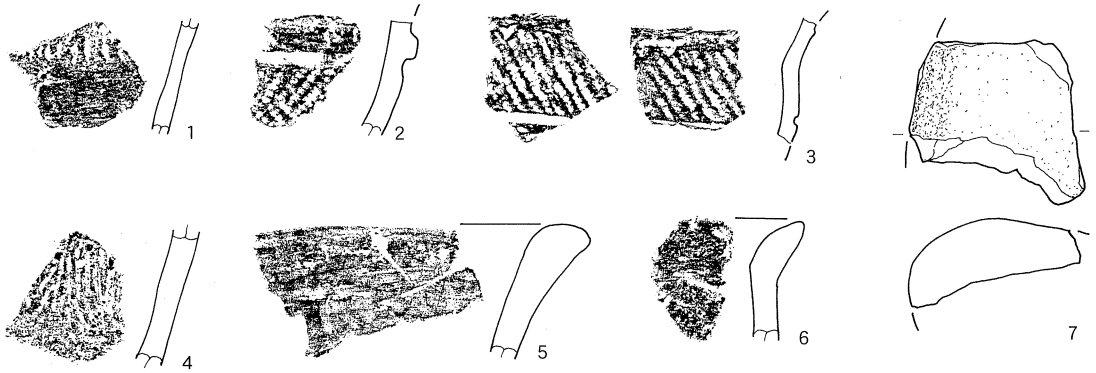
シオフキガイ　*Mactra quadrangularis*

腹足綱　Class Gastropoda

アクキガイ科　Muricidae

アカニシ　*Rapana venosa*

（小川　和博）



第18図　遺構外出土遺物

0　10cm
(1/3)

第Ⅲ章　まとめ

1　はじめに

今回調査対象となった沼田貝塚は、霞ケ浦に注ぐ１級河川沼里川流域にあたり、南側の小野川や利根川といった大河川に形成された稲敷台地の南東側、標高28.5m前後の舌状台地に立地している。またここは南側の沼里川から入り込む小内湾と北側から入り込む小支谷が交差する位置にあたり、比較的広い平坦面と緩傾斜面が複雑に入り組み、起伏はあるものの、急傾斜地は見当たらない。現在正確には貝層の位置を確認できないが、その緩傾斜面の縁辺部に地点貝塚として存在していたものと推定される。

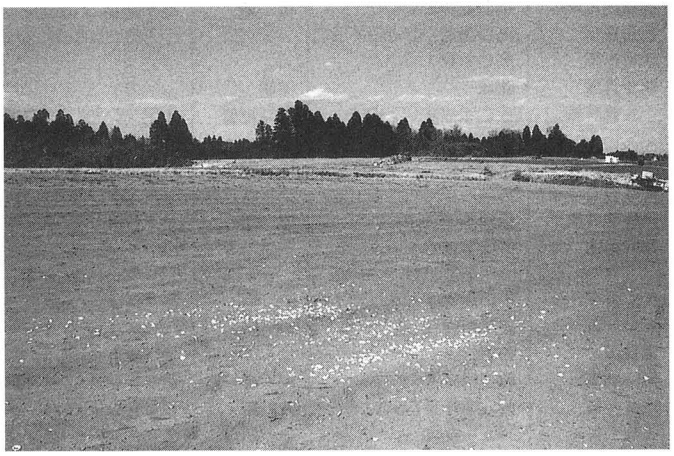
沼田貝塚の発掘については今日までその履歴はなく、今回がはじめてであるが、実は周知されたのは古く明治時代のことである。周辺の貝塚には椎塚貝塚をはじめ、陸平貝塚、貝ヶ窪貝塚あるいは大山柏の史前学研究所による小松川貝塚、センゲン貝塚や広畑貝塚など明治から昭和前半にかけて調査され、その後も学史的に標式遺跡など重要視される貝塚が数多くあり、これらと比べれば規模や出土遺物などその魅力に欠けていた遺跡であったのであろう。そのため、今日まで規模や時期などその内容について明らかになったことはなく、地名表のなかだけで遺跡の所在が明記され続いていたものと思われる。

2　沼田貝塚沿革史

沼田貝塚が遺跡として所在が明らかにされるのは、明治26年『東京人類学雑誌』の椎塚貝塚の発掘報告からである。そこには村田貝塚、台畑貝塚、蒲ヶ山貝塚等とともに遺跡名と地点が記載されている。ただし沼田貝塚としてではなく、「土岐屋敷跡貝塚」および「トキヤシキアト(地形図上に表記されている)」としてである(八木他1893)。この土岐屋敷跡貝塚が「沼田貝塚」と名称が改変されるのは、おそらく昭和34年酒詰仲男による『日本貝塚地名表』からであろう(酒詰1959)。その前に、昭和24年の調査で、昭和44年に刊行された清野謙次の『日本貝塚の研究』がある。そのなかで霞ヶ浦沿岸の貝塚群として稲敷郡石器時代地名一覧表があり、旧沼里村沼田地先内に８ヶ所の遺物散布地が掲載されている(清野1969)。あいにくこの地名表では沼田貝塚あるいは土岐屋敷跡貝塚としての名称はでてこない。狭い地域であり、８ヵ所のうち確実にどこかに相当するものと推定できるものの地名表のみで特定することができなかった。

さて、酒詰仲男の「日本貝塚地名表」は全国4,251ヵ所の貝塚が網羅され、茨城県内では241ヵ所が記載されている。ここには遺跡名に加え、異称名として別名称が列記されている。例えばこの沼田貝塚は異称「土岐屋敷跡貝塚」であり、村田貝塚は異称「白畑貝塚」「野畑貝塚」といった具合である。さらに所在地・現存存否・自然遺物・鹹度・文化遺物・編年・主要文献・地図・現地踏査（実査）等の詳細な記載項目があり、以後の貝塚研究の礎となるばかりか、今日作成される遺跡地名表の基本となっているもので、これ以上の遺跡地名表はいまだない。なお、沼田貝塚の項目欄には最も重要事項である編年・出土遺物・鹹度の項目が抜けており、今回の調査までそれら事項を正確に埋めることはなかった。

また、昭和41年の九学会連合による利根川総合研究の遺跡分布調査が実施され、対岸に位置する村田貝塚が早稲田大学西村正衛教授によって昭和43年11月に発掘調査が実施されている。報告は早稲田大学教育学部「学術研究」30と氏の集大成「石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として－」のなかにまとめられているが、ここ沼田貝塚については「学術研究」30の遺跡分布図に地点が明記されている（西村1987）。



第19図　沼田貝塚近景写真(『江戸崎町史』より)

こうした経過のなか、県内で本格的な貝塚実態

調査が実施されるのは、茨城県歴史館における「県内貝塚における動物遺存体の研究」をテーマとする学術調査を嚆矢とする。昭和53年から同55年の三ヵ年行われ、現地踏査を中心とする地道な調査であった。これによって県内374ヵ所の貝塚の実態がほぼ把握され、将来を見越した保存・保護の指針を含めた基礎資料が整った。その成果については斎藤弘道氏における一連の報告がある（斎藤1981･1982･1998･2001）。そしてほぼ同時期の昭和54年には「茨城県史料－考古資料編－　先土器・縄文時代」が刊行された。いずれも酒詰仲男の地名表以来の画期的な調査であり報告である。しかし、沼田貝塚については十分把握されてはいないようで、時期を「後期」としているのみで、貝種や遺物の記載がないのは酒詰地名表と同じである。その後斎藤氏は平成10年「茨城県の縄文時代貝塚(３)」のなかで貝種の項目においてはじめて「ハマグリ」と記載した。そして時期を「後期」としている。あいにく現地確認によるものか、誤記載かは不明で、出典根拠も明確ではない。

その以前の平成５年には「江戸崎町史」が刊行される。ここには遺跡名の記載があっても、遺跡の内容には全く触れられていない。ただ、現在では全く見られない貝塚の近景写真が掲載されており、隣接する圏央道やバイパスの開通に伴って付近の景観が大きく変わりつつあることから、たいへん貴重な写真となっている(第19図)。そして平成11年に実施された埋蔵文化財包蔵地調査においてはじめて時期を「中期(加曾利Ｅ式)・後期」として認識される。台帳には「遺物の散布は広範囲にわたって多く分布し、貝も見られる」との所見があるものの、貝種の記載が漏れていたことはたいへん惜しまれる。

ここで茨城県歴史館が実施した貝塚実態調査において斎藤弘道氏が「茨城県歴史館報８」および「茨城県歴史館報25」で報告した「茨城県縄文時代貝塚地名表」のうち、稲敷市内(旧江戸崎町・新利根町・桜川村・東町)の貝塚地名表を掲載しておきたい。

表２　稲敷市内貝塚地名表

貝塚名	所在地	時期	主体貝種	備考
	旧江戸崎町			
沼田貝塚	沼田字神田2077－6ほか	中　期	ハマグリ、シオフキ、マガキ、アカニシ	土岐屋敷跡貝塚
明神貝塚	犬塚三本松1248	後　期	ヤマトシジミ	犬塚貝塚,消滅
三本松貝塚	犬塚三本松1248	不明		消滅に近い
吹上貝塚	法蓮坊甲526ほか	中～後　期	ハマグリ、アカニシ	
村田貝塚	村田山後26ほか	中　期	ハマグリ、オキシジミ、シオフキ	白畑貝塚・野畑貝塚
村田貝塚Ⅲ・Ⅳ	村田山後26ほか	前期後葉	ハマグリ	
南平貝塚	佐倉字佐倉2350	不明		
山中貝塚	佐倉字佐倉1509	不明		
小松川貝塚	佐倉字佐倉896ほか	中～後　期	ハマグリ	
椎塚貝塚	椎塚中の峯120ほか	後～晩　期	ハマグリ	
蒲ヶ山貝塚	蒲ヶ山	後　期		
二の宮貝塚	佐倉二の宮	中　期		
センゲン貝塚	佐倉センゲン	中　期	ハマグリ	
高田岡貝塚	岡字大畑	後　期		
台畑貝塚	台畑	後　期		吹上貝塚のことか
神田道貝塚	小羽賀神田道690	後　期	ハマグリ、アカニシ	小羽賀貝塚
蓮沼貝塚	高田蓮沼			
中根貝塚	高田中根			
駒塚貝塚	駒塚	不明		
中佐倉貝塚	佐倉字佐倉1779ほか	前期後葉	オキシジミ、シオフキ、アカニシ、ハマグリ	貝ブロック17箇所
	旧新利根町			
下根本貝塚	下根本鍛冶屋台	後　期	ハマグリ	栗山章氏教示
道成寺貝塚	寺内中坂道成寺畑4231	後～晩　期	ヤマトシジミ、ハマグリ	貝輪
伊佐津貝塚	柴崎字伊佐津	後　期	ヤマトシジミ、ハマグリ	栗山章氏教示
狸穴貝塚	柴崎字狸穴	不明		栗山章氏教示
	旧桜川村			
大室貝塚	四箇大室字村坪	中　期	ハマグリ、サルボウ	東西2地点、村坪貝塚含む
所作貝塚	四箇所作・山来	前　期	ハマグリ、アサリ	
南貝塚	四箇	中～後　期		
大門貝塚	四箇松の木	中～晩　期	ヤマトシジミ、ハマグリ	
竜貝貝塚	阿波字竜貝779ほか	後　期	ヤマトシジミ、ハマグリ	
石神下貝塚	阿波字竜貝	中　期	ヤマトシジミ、ハマグリ	
広畑貝塚	岡飯出字広畑638	後～晩　期	ハマグリ、シオフキ、アカニシ	

貝塚名	所在地	時期	主体貝種	備考
前浦貝塚	浮島前浦3125	早～前　期		
岡ノ内貝塚	浮島岡ノ内	早～中　期		
貝ヶ窪貝塚	浮島字挟間久保2802	前　期	ハマグリ、アサリ、アカニシ、シオフキ、マガキ	
上の台貝塚	浮島上の台3275	早～前　期		
天神台貝塚	阿波天神台	後　期	ハマグリ	
塚原貝塚	古渡字塚原	後　期		
村坪貝塚	四箇村坪	中　期		
南貝塚	阿波南			
	旧東町	後～晩　期	ハマグリ, サルボウ	
福田貝塚	福田字神明前1674ほか	後～晩　期	ハマグリ、サルボウ、シオフキ、ヒメシラトリガイ	
西平貝塚	東半田839ほか	中～後　期		

斎藤　1981・1998・2001より抜粋

3　貝相について

現在の沼田貝塚については、ボーリング調査を含め調査区周辺の緻密な踏査にも関わらず、その規模や位置関係について全く不明である。平成５年刊の「江戸崎町史」に掲載されている第19図の貝塚近景写真を見る限り、比較的明瞭な地点貝塚として確認できるものの、その撮影当時における記録がない。今回の本調査において撹乱層および周辺から採集資料として、４種の貝類が確認できた。ハマグリ・シオフキガイ・アカニシ・マガキである。時期は阿玉台式期後半から加曽利Ｅ１式期に限定できそうである。

４種の貝類はいずれも湾奥泥底の干潟を生息域(松島1979)としており、少なくともこれら貝類は貝塚形成時における貝類採取活動の場、さらにその環境を如実に示しているといわれている。なかでもまとまっているのがハマグリとシオフキガイである。対岸の南1.3kmに位置する村田貝塚もほぼ同時期の貝類として22種確認され、ハマグリを最多として、マガキ、オキシジミ、シオフキガイが多く、サルボウ、アカニシ、カガミガイ、アサリ、ベンケイガイ、イタボガキなどが報告されている。そして魚類としてはスズキ、クロダイを主体にマダイ、ボラ、エイが、哺乳類ではイノシシ、ニホンジカ、イルカ、ノウサギの他に人骨とイヌが出土している(西村1981・1989)。

沼田貝塚と村田貝塚は、支谷は異なるものの、羽賀沼－小野川－霞ヶ浦と連なる水系における漁撈活動の場として共有していることは明確で、わずか４種の確認であるが、村田貝塚と同様な状況を呈していたものと理解している。それはオキシジミの検出はできなかったものの、多出するハマグリ、シオフキガイ、マガキといった３種を確認していることからそれを傍証しているといえよう。なお、マガキについては本来岩礁性貝類であろうが、土浦市上高津貝塚出土のマガキの中に「礫に付着した個体が多く検出され」ており、これらは「あくまでも干潟内に存在した小礫に付着して生息していた(真貝1994)」との見解がある。当貝塚や村田貝塚出土のマガキも同様な環境下、すなわち遠方から運びこまれたのではなく、羽賀沼－小野川－霞ヶ浦水系において採取されたものと思われる。

さて村田貝塚における調査所見で注目されるのは、時期ごとに、貝殻等の廃棄地点を変えて、ひとつの貝塚を形成しているとの見解である(西村1981・1989)。これは沼田貝塚の成り立ちに対して示唆的である。少なくとも出土遺物を見る限り、加曽利Ｅ１式期段階では比較的狭い漁場を両遺跡が共有していることになるが、その規模からみると村田貝塚がはるかに広い占有地を確保していたことになる。これらの現象は、単純にみて村田貝塚集団のおこぼれを沼田貝塚集団が分かち与えられているようにみえ、そこには本村－分村、主従の関係が読み取れる。確かに村田貝塚は出土遺物の内容や量から判断しても周縁における中枢であったことは確実である。これを平等とする複数の集団とみるならば、明らかに物質量的な差がありすぎ、生産力の差とみることができ大きな問題である。これはあくまでも別集団としてみた場合であって、同じ集団と考えれば理解しやすい。すなわち、村田貝塚の形成にあたっては時期ごとに廃棄の場を移動させている事実から、沼田貝塚は谷を挟んだ村田貝塚集団による別の廃棄場であった可能性が推測できる。実は村田貝塚を廃村にした後、ここ沼田貝塚周辺に新たな拠点的集落が形成されており、ここ沼田貝塚は村田貝塚集団による新たな「進出」「移住」場所であった可能性が指摘できる。

4　有段竪穴建物の今日的課題

今調査において、いずれも部分確認であるが、３軒の竪穴建物が検出された。そのなかでＳＩ03と命名した１軒

がいわゆる有段竪穴建物である。その規模は上床部が南北軸5.5m、東西軸4.15mの長方形。下床部は南北軸3.17m、東西軸2.75mの長方形を呈する。上床部の幅は68～150cm前後を測り、柱穴は下床部の隅に位置する４本隅柱である。上床部と下床部の壁高は13.5～23.5cmでほぼ垂直に掘り込まれている。焼土跡は残存しているが、掘り込みのある明瞭な炉跡はない。時期は中期後葉・加曾利Ｅ１式期前葉に比定される。これら建物構造の属性および所属時期すべて有段竪穴建物としての定義の範疇に収まり、異議を唱える余地はない。

つまり、有段竪穴建物の定義については今橋浩一氏における「二段床構造住居址」および中野修一氏における「有段式竪穴遺構」に集約される。それぞれ上下の床面に対する呼称は異なるが、「ベンチ部(テラス部)と称される上床部と、一段低く掘られた下床部の二段構造となっている(中野1985)」竪穴建物である。人類の建物形態として２万年の長期にわたり続けられる竪穴建物の歴史のなかでも、段をもついわゆる広義のベッド状遺構に分類される(宮本1990)竪穴建物との違いは、上床と下床部とが明瞭な比高差をもち、上床のほぼ中央部に下床部が掘り込まれる建物である。しかも時期だけではなく、その地域性が特定できるということでむしろ特殊といえよう。すなわち、阿玉台式期から加曾利Ｅ式前半期という短期間に出現・盛行・消滅すること、ここ茨城県と千葉県を中心に隣接する栃木県・埼玉県・東京都が分布圏内を担う構造は、例え今後縄文中期の拠点的大集落の調査が追加されても、これらの様相を書き改める必要はなく、明確な時間幅と地域範囲を限定できるのである。

最近県内の大規模調査において、この有段竪穴建物の検出が多くなってきている。かつて鈴木美治氏が県内の阿玉台式期の竪穴建物とともに有段竪穴建物を集成した(鈴木1984)10年後、茨城県教育財団縄文時代研究班が平成７年に10遺跡21遺構(縄文時代研究班1996)をまとめている。その後茨城県教育財団では、桜川市犬田神社前遺跡(榊原他2004)、茨城町宮後遺跡(和田他2005)で、さらに日考研茨城による阿見町竹来遺跡(小川他1999)、土浦市六十原遺跡(小川他2003)、常陸大宮市西塙遺跡(小川他2009)の調査で有段竪穴建物を検出している。

実はこの有段竪穴建物についてはその独特な形態ゆえに研究の方向性に一貫性が欠如している。それは機能論が優先し、型式・形態論があり、系統論がある。機能論については川崎純徳氏(川崎1981)にはじまり今橋浩一氏(1985)によるまとめがある。多くはキーワードである『炉なし』という属性によって遺構の性格が語られる。それはその建物が人々の日常生活における居住基盤である「住居」と呼ぶべきかどうかといった基本的な問題である。最近でも石器の多出から「石器工房跡」説（後藤1996)。磨石類の出土から「食品加工場・厨房」説(榊原他2004)。さらには出産のための「産屋」説など、かつて今橋氏がまとめた諸説以後もいわゆる「非住居」説をとる論拠は根強い。しかし、現在の発掘調査では出土遺物あるいは床面の硬度などの状況証拠をもって機能の確たる証拠を得ることはほとんどできない。将来緻密な考古学データを重ね合わせ、さらに検証可能な自然科学分野における研究技術の発展に期待したい。また型式・形態論については鈴木美治氏、茨城県教育財団縄文時代研究班および谷口陽子氏における笠間市西田遺跡(谷口1996)の集成に集約される。一方系統論については中野修一氏説が卓越している。まずその起源を東北北部の円筒下層ｄ式期に求め、大木式土器・フラスコ状土坑とこの有段竪穴建物の「三点セット」が南下し拡散していく現象を「移住」によるものとした。この見解に対して今橋氏による問題提起がある(今橋1985)。また菅谷通保氏はこの移住について「肯定にせよ否定にせよ展開に乏しい。移住は、最も住居研究が直接的に語れる問題(菅谷1999)」であるとする。これは建物のもつ性格から見よう見真似といった単なる「影響」「伝播」だけでは建物の設計図は正確には伝わらない。直に「移住」という形で設計図をもった集団が指揮して建ち上げられる性質のものであるからであろう。さらに茨城県教育財団縄文時代研究班が集成にあたって、その系統論について「認識の甘さから軽々に中野修秀氏の論を引用し、「有段式竪穴遺構は大木８ａ式の住居形態が阿玉台式土器文化圏でも受容された」ものと捉えたが、隣接する福島県に現在までの出土例がないこと、阿玉台式の古い段階から有段式竪穴遺構が確認されていることから、この問題について今後の出土例の増加を待ちたい(縄文時代研究班1996)」との結論に至るなど中野説を間接的に否定している。

なお、これらの問題点に対し菅谷氏は「同時に存在する他類型の住居との関係を構造的に把握する必要性(菅谷1999)」があることを指摘する。となると鈴木美治氏が県内阿玉台式期の竪穴建物を集成した(鈴木1984)25年前における同時存在の多様性が改めて問題提起となる。ただし、共存する竪穴建物の時期決定における「土器型式」の設定が大きな壁となることもまた事実であろう。阿玉台各型式の吟味、また阿玉台Ⅳ式から加曾利Ｅ１式の中間における中峠式(タイプ)、さらに大木式および勝坂式との関係、それらとの共伴関係がある。こうした時間軸の確立した段階

で竪穴建物の形態を併せてもちはじめて「住居(建物)型式」が成立するのであるが、「出土遺物の少なさ」「出土遺物の時期混在」などのようにそれらの必要条件はまだ整っているとは思われない。「広い時間幅で考えなければならないものが多く」「各住居跡の時期が明確に位置付けることができない」(縄文時代研究班1996)とは正直な見解であろう。ただ大筋において阿玉台式期から加曾利Ｅ１式期段階の建物形式を追うことは可能で、繰り返し述べている茨城県内における鈴木美治氏(鈴木1984)にはじまり、茨城県教育財団縄文時代研究班の集成（縄文時代研究班1995・1996）は少なくともこの有段竪穴建物について大きな成果をあげ、問題提起したことは事実である。

（小川　和博）

参考文献

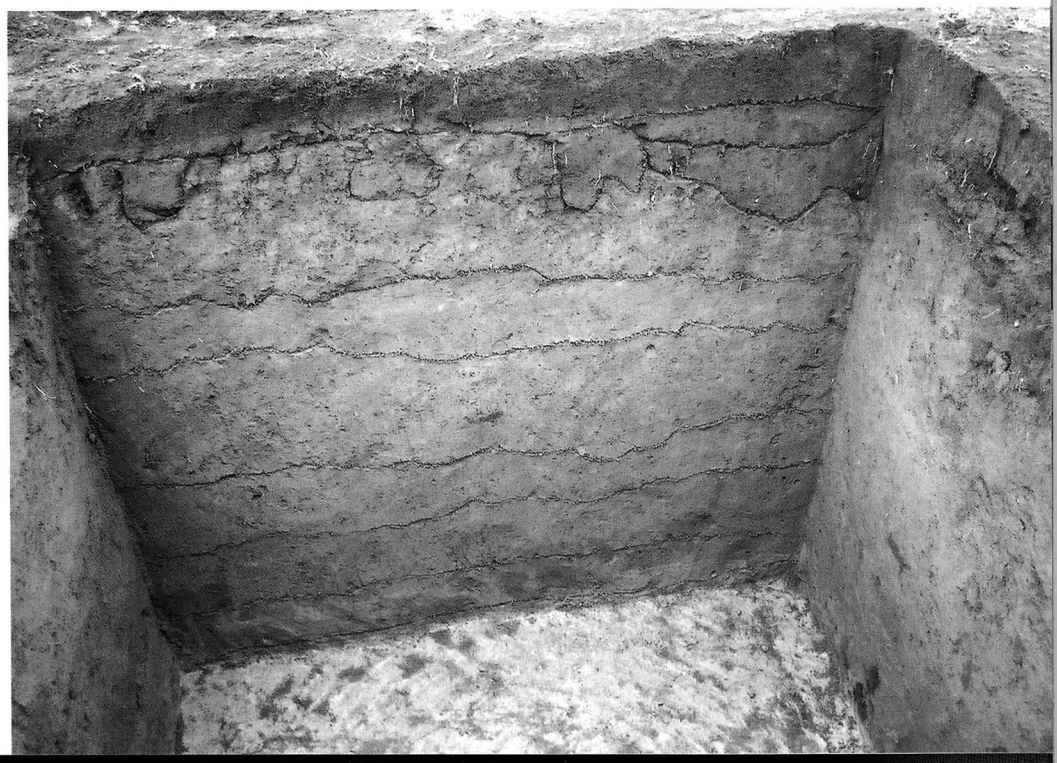
浅川利一　2000「竪穴住居の空間分節」『古代史の論点②　女と男、家と村』小学館
阿部昭典　2007「縄文時代の「ベッド状遺構」の検討」『新潟考古』第18号
茨城県歴史館　1979『県内貝塚における動物遺存体の研究(1)』
茨城県　1979『茨城県史料　考古資料編　先土器・縄文時代』
茨城県歴史館　1980『県内貝塚における動物遺存体の研究(2)』
茨城県歴史館　1981『県内貝塚における動物遺存体の研究(3)』
茨城県教育財団縄文時代研究班　1995「茨城県における縄文時代中期前半の住居跡の形態について」『研究ノート４』茨城県教育財団
茨城県教育財団縄文時代研究班　1996「関東地方における縄文時代中期の「有段式竪穴遺構」について」『研究ノート５』茨城県教育財団
茨城大学人文学部考古学研究室「常陸の貝塚」茨城大学人文学部考古学研究報告６冊
今橋浩一　1985「阿玉台文化の一側面―二段床構造住宅址の検討―」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版会
牛久町赤塚遺跡発掘調査会　1984「赤塚遺跡発掘調査報告」
江戸崎町史編纂委員会　1994『江戸崎町史』江戸崎町
大塚達朗　1986「日本歴史学界の回顧と展望」『史学雑誌』第95編第５号
小川和博・大渕淳志　1999「阿見町竹来遺跡発掘調査報告書(第二次調査)」
小川和博・大渕淳志・関口満　2003「六十原遺跡―宅地造成工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―」
小川和博・大渕淳志　2009「西塙遺跡発掘調査報告書」
川崎純徳　1977「茨城における貝塚研究の現状」『茨城県史研究37』
川崎純徳他　1980「石岡市東大橋原遺跡―第三次調査報告―」石岡市教育委員会
川崎純徳　1981「いわゆる「ベッド状遺構」の諸問題」『常総台地』12　常総台地研究会
川崎純徳　1981「茨城県石岡市大作台遺跡発掘調査報告」石岡市教育委員会
川又清明他　2002『宮後遺跡１―やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告―Ⅱ』茨城県教育財団文化財調査報告第188集
瓦吹堅　1973「田尻町上の代遺跡」日立市教育委員会
九学会連合　1971「利根川　自然・文化・社会」九学会連合利根川流域調査委員会
小林孝・飯島一生　1999『伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書５―前田村遺跡Ｊ・Ｋ区』茨城県教育財団文化財調査報告第147集
清野謙次　1969『日本貝塚の研究』岩波書店
榊原雅彦他　2004『犬田神社前遺跡1―北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告―Ⅷ』茨城県教育財団文化財調査報告第229集
後藤信祐　1996「槻沢遺跡Ⅲ」『栃木県埋蔵文化財調査報告第171集』栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
斉藤弘道　1981「茨城の縄文時代貝塚(1)」茨城県立歴史館報8
斉藤弘道　1982「茨城の縄文時代貝塚(2)」茨城県立歴史館報9
斉藤弘道　1998「茨城の縄文時代貝塚(3)」茨城県立歴史館報25
斉藤弘道　2001「茨城の縄文時代貝塚(4)」茨城県立歴史館報28

佐藤誠　1999「Ⅲ．縄文時代文化研究の成果と展望(1)遺構研究　古鬼怒湾岸における貝塚研究」『縄文時代10』縄文時代文化研究会
酒詰仲男　1959「日本貝塚地名表」土曜会
酒詰仲男　1961「日本縄文石器時代食料総説」
真貝里香　1994「上高津貝塚Ａ地点」慶応義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報９
菅谷通保　1999「Ⅲ．縄文時代文化研究の成果と展望(1)遺構研究　竪穴住居」『縄文時代10』縄文時代文化研究会
鈴木裕芳　1980『諏訪遺跡発掘調査報告書』日立市教育委員会
鈴木美治　1984「阿玉台式期における竪穴住居跡の形態についての一考察」『年報３』茨城県教育財団
高根信和他　1981「下広岡遺跡調査報告」『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』茨城県教育財団
竹下次作　1940「鳩崎村センゲン・小松川貝塚行」『史前学雑誌』第12巻第２、３合併号
谷口陽子　1996「５　有段式竪穴遺構の位置づけ」『笠間市西田遺跡の研究』筑波大学歴史・人類学系
常木晃　2004「第１節　稲荷山遺跡の縄文時代集落について」『稲荷山』大栄町教育委員会
鳥居龍蔵　1899「常陸吹上貝塚より発見の人類大腿骨に就いて」『東京人類学会雑誌』第14巻第156号
中野修秀　1985「有段式竪穴遺構に関する覚書―関東地方縄文中期における異系統の竪穴住居址―」日本考古学研究所集報Ⅶ
中野修秀　1987「有段式竪穴遺構再考―新資料の検討とコメントを中心として―」日本考古学研究所集報Ⅸ
西村正衛　1960「利根川下流における縄文中期文化の地域的研究(予報)」『古代』第34号
西村正衛　1964「縄文文化地域研究の基礎的概念―利根川下流域の研究を中心として―」早稲田大学教育学部『学術研究 13』
西村正衛　1966「茨城県稲敷郡浮島貝ケ窪貝塚―東部関東における縄文前期後半の文化研究その三―」早稲田大学教育学部『学術研究15』
西村正衛　1968「利根川下流における縄文草創期から中期の遺跡分析布とその文化の特殊性―主として人工遺物の性格―」『人類科学』20集
西村正衛　1971「利根川下流における縄文文化編年的研究の概要」『利根川』
西村正衛　1979「村田貝塚(第ⅠおよびⅡ地点)」『茨城県史料　考古資料編　先土器・縄文時代』
西村正衛　1981「茨城県江戸崎町村田貝塚（第一次調査)」早稲田大学教育学部『学術研究30』
西村正衛　1989「18．茨城県江戸崎町村田貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として』早稲田大学出版部
原田昌幸　1986「阿玉台式土器前半期の一様相―常磐道柏地区の調査成果から―」『研究紀要』10　千葉県文化財センター
吹野富美夫他　1999『伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書４―前田村遺跡Ｇ・Ｈ・Ｉ区―』茨城県教育財団文化財調査報告第146集
松島義章　1979「南関東における縄文海進に伴う貝類群集の変遷」『第４紀研究』17－４
宮本長二郎　1983「関東地方の縄文時代竪穴住居跡の変遷」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
宮本長二郎　1990「ベッド状遺構と屋内施設」『季刊考古学』第32号
宮本長二郎　1996「日本原始古代の住居建設」中央公論美術出版
八木奘三郎他　1893「常陸国椎塚介墟発掘報告」『東京人類学会雑誌』第87号
和田清典他　2005『宮後遺跡２―やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告―Ⅲ』茨城県教育財団文化財調査報告第240集

写 真 図 版

1　遺跡遠景

2　調査区全景



3　基本層序

1　竪穴建物SI01

2　竪穴建物SI02
有段竪穴建物SI03
3　有段竪穴建物SI03出土遺物
4　竪穴建物SI02
有段竪穴建物SI03掘形

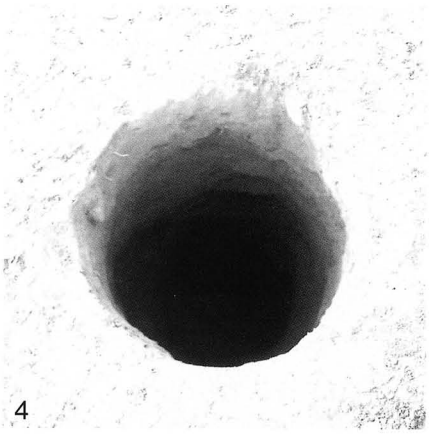
1　土坑SK01

2　土坑SK02

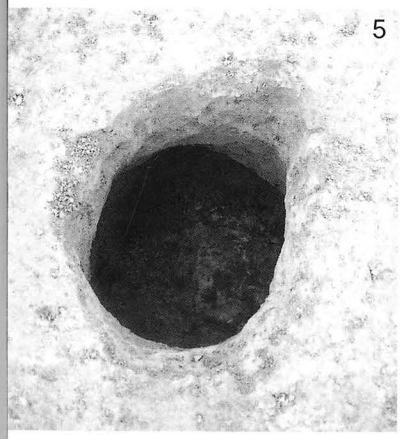
3　溝SD01

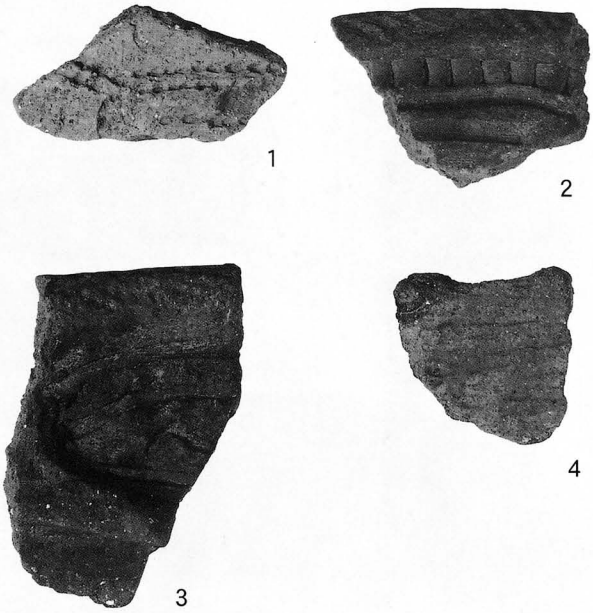
1　溝SD02

2　溝SD03

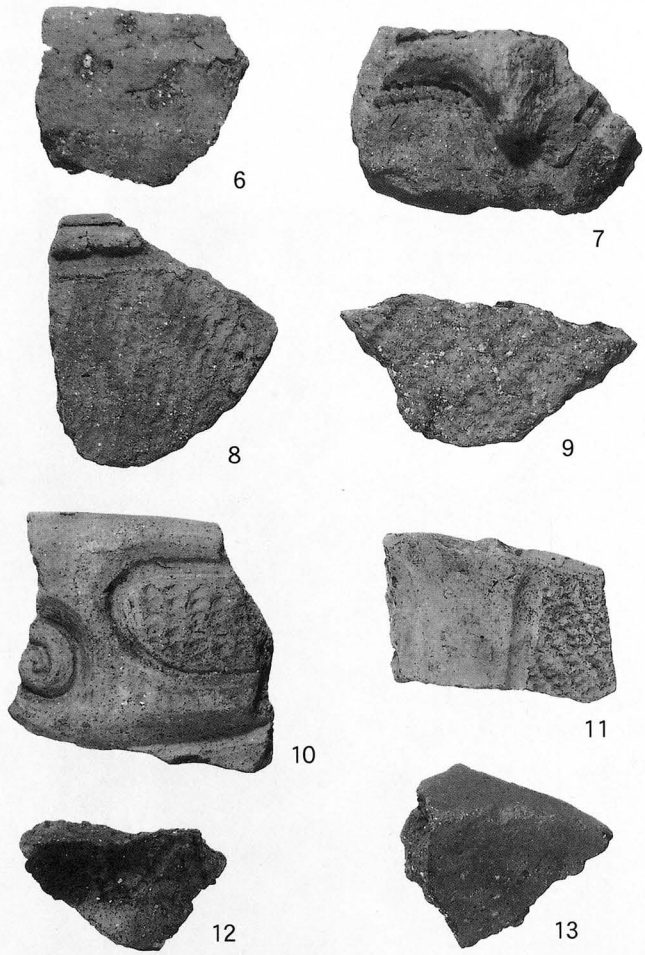


3　柱穴P-1
4　柱穴P-2
5　柱穴P-3
6　柱穴P-4

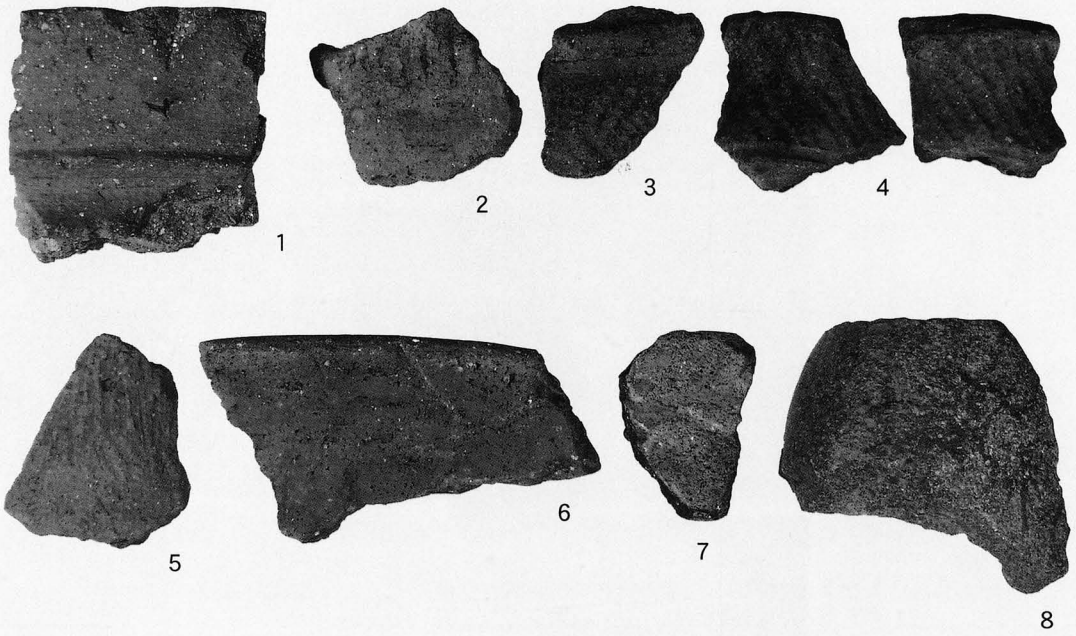




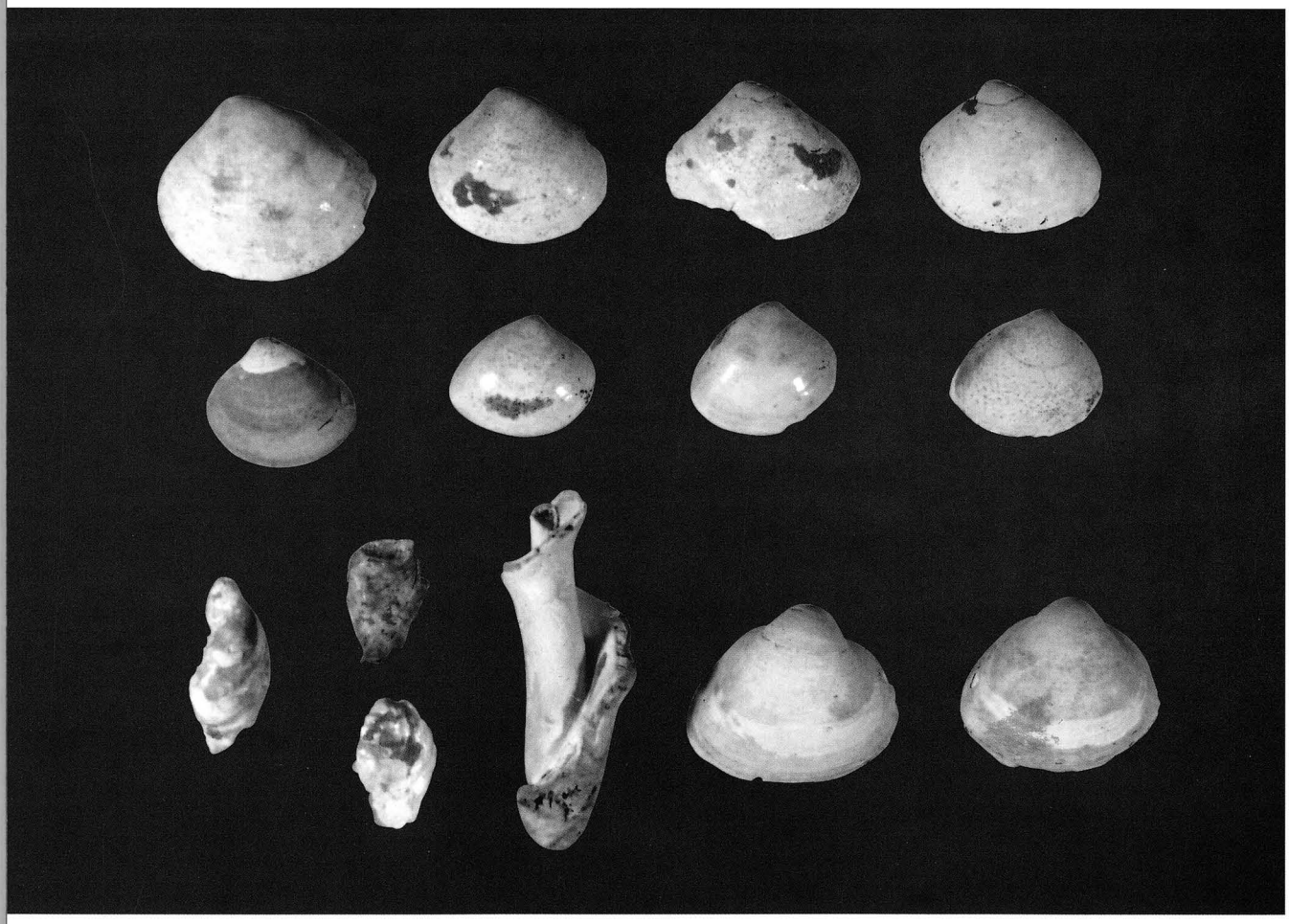
1～3　SI02
4・5　SI03



6～11　SK01
12・13　SK02



1　SD01　　2～8　表採資料



沼田貝塚出土貝類（表採資料）

報告書抄録

ふりがな	ぬまたかいづか　はっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	沼田貝塚　発掘調査報告書
副書名	
巻　　次	稲敷市埋蔵文化財調査報告書第７集
編者名	小川和博
執筆者	小川和博・大渕淳志・遠藤啓子
編集機関	有限会社 日考研茨城
所在地	〒300－0508　茨城県稲敷市佐倉3321－1　　TEL.029－892－1112
発行機関	稲敷市教育委員会
所在地	〒302－0198　茨城県稲敷市八千石18－1　　TEL.0299－79－3211
発行年月日	2010年６月30日

収録遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
沼田貝塚（ぬまたかいづか）	茨城県稲敷市（いばらきけんいなしきし）沼田字神田（ぬまたあざかんだ）2077番6（ばん）	441	031	35度57分13秒8	140度17分33秒	20100301～20100320	144.0㎡	携帯電話基地局建設に伴う記録保存調査

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沼田貝塚	集落跡 貝塚	縄文時代 中世	竪穴建物　３軒 土坑　２基 溝　３条 柱穴　４基	縄文土器・磨石・貝類	縄文時代中期後半の有段竪穴建物が１軒検出された。

要約	本貝塚は部分的に貝殻の散布がみられるが、貝層は明瞭ではない。調査は南方に緩傾斜する台地縁辺部にあたる144㎡で、ここに縄文時代中期後半の集落跡が確認された。いずれも全貌を明らかにできていないが、竪穴建物が２軒と有段竪穴建物１軒が検出された。有段竪穴建物は5.5mを図る長方形を呈し、覆土中から加曾利Ｅ１式期の深鉢土器１点がほぼ完存品として確認された。因みに有段竪穴建物の検出は稲敷市内ではじめてである。

茨城県稲敷市
沼田貝塚発掘調査報告書

平成22年（2010）6月30日　発行

編　集　有限会社　日考研茨城
茨城県稲敷市佐倉3321－1

発　行　有限会社　日考研茨城
稲敷市教育委員会
茨城県稲敷市八千石18－1　TEL　0299-79-3211

印　刷　有限会社　田　辺　印　刷
茨城県稲敷市佐倉3321－5